

パイデイア（そのⅦ）

—— 貴族社会…葛藤と変容 ——

ここまでのところ、本土と西方地域に居を定めたギリシア人にイオニア文化が及ぼした影響のいかにあつたかを具体的に辿ってきたけれども、それは、ソロンの統治したアテナイでの宗教的・政治的な闘争を例にとつてのものであり、さらには、伝統宗教や古えの貴族階級の体育的理想に果敢に挑まれたクセノパネスの聖戦をそうしてのものであつた。このような聖戦に敵対する貴族の面々は、みずからの奉じる理想が狭く限定された、それ自体として弾力性に欠ける、保守的でしかも反知性的なものだとネガティブに評していたものの、これ自体はしかし、まことに強力な社会勢力——数の上での影響なら取るに足りない——に変わりはなく、革新者たちに向けて精神的にも知性的にも容赦のない抵抗をくり広げて止まなかつた。忘れられてならないのは、ソロンが、いかなる後継者連中にも勝つてイオニアの進歩的影響をわが身にまとうていたにもかかわらず、かれ以後のギリシア本土の詩人たちは、その大半が『激しい反動主義者』であつたことだろう。前六世紀の終わりに向けてそのような『反動』を主導した二人の人物、すなわち、テバイ人のピンダロスとメガラのテオグニスとはともに、みずからの出身母体であつた貴族階級に心からの称賛を捧げて惜しまなかつた。かれらの作品が語りかけた相手は、イオニア思想によって喚起された社会革命への反感と不信

G・ハイエツト
村島義彦 訳

でひたすらに凝り固まつた『貴族たち』であつた。けれども、そうした貴族たちが生きていたのは、過去から平和裡に存続してきた世界でなく、新しい時代に絶え間なく攻め入られ、あらんかぎりの精力を振り絞つてみずからを護らないわけにはいかなかつた世界であつた。貴族階級は、精神面と物質面での生き残りを賭けたこの闘争を介して、みずからの『内なる価値』を心の底から確信できた。そのような確信には、テオグニスやピンダロスで何度もお目にかかれたから、双方は、共通の主張を代表する人物として——その性格や芸術的業績に途方もない差が認められたものの——ひとまとめに研究されてしかるべきだろう。というのも、ピンダロスの仕事分野はコロスの抒情詩で、対してテオグニスのそれは格言詩であつたが、二人の詩人はともに、文化史における同一の段階を代表していたからである。かれらに靈感を吹き込んだのは、貴族たちの階級意識——みずからの美点を誇らしく確信した——であつた。すなわち、かれらが体現していたのは『貴族的な文化理想』にはかならない。もつともそれは、前六世紀の終わりに向けたそれであつたけれども……ギリシア本土で貴族階級が奉じた理想は、ピンダロスとテオグニスの手でこのように注意深くかつ権威を込めて記述されたが、それは、教育的な重みの上でも完成度の上でも、イオニアの理想より桁外れに優れて

いた。後者には、自然的な生活と個人の主張をともに賛美するといった、さまざまの自己矛盾的試みが溢れていたからである。ヘシオドス、ティルタイオス、ソロンに加えて、ピンドロスやテオグニスまでも、細心の注意を払いながら、みずからの言葉に耳を傾ける人びとの教育に着手した。かれらは、このような目論見において、あまねくイオニアの芸術や思想にみられる無邪気な自然主義とわけても異なっていた。方向を異にした二つの理想の衝突は、いうまでもなく双方の特性をしっかりと強めたが、だからといって、そのような衝突を中心に据えて、ギリシアの真に偉大な教育家たちがすべからず本土の人びとで占められているように見受けられる、という事実まで、もっぱらに——あるいは主として——説明づけてよいというわけではない。貴族階級は、いっそう高次の文化に向けたあまねく衝動の母体であつて、その統治はむしろ、イオニアよりも本土においていっそう長く存続した。本土における新たな動きは、おのずと、既存のタイプに対立する特定の新たな人間理想に具体化されたが、それなど、いく分はここにいう「存続」のしからしめるところかもしれない。クセノパネスは、みずからの知的エネルギーを誇らしげに意識しながら古えの封建的理想を攻撃して、まことに時代遅れで化石化している、と罵った。けれども、ピンドロスとテオグニスでは、同じ理想が突如として驚くほど新たな道徳的・宗教的な力を手にしていた。二人の社会的位置や、せつせと語りかけた——あるいはその代弁に余念のなかつた——階層が何であつたかは、もちろん忘れられてならないが、それでもかれらの詩は、時空を超えた人間性の深みにしっかりと根ざしていた。もつとも、当人たちの信条を述べ上げる確固としたエネルギーに欺かれて、そこに擁護されていたのが「滅びゆく世界」であつた点は忘れられてならないけれども……。かれらの詩は、政治生活や社会生活における「貴族の再生（ルネッサンス）」を始動できなかつたけれども、

新興の諸力によってみずからが最も由々しい危機に陥っていた只中で、貴族的理想を永遠化し、この理想がもつ社会構成力をギリシア国民の永遠の財産にまで仕上げたのだつた。

われわれは、前六世紀と前五世紀のギリシアにおける貴族階級の実生活とその社会状況をなただけ具体的に思い描いてきたけれども、それは、ひとえに詩人たちの「おかげ」というほかはない。造形美術にしても、この時代を扱つた歴史家たちの数少ない遺稿にしても、ともに、詩の中に保持されていた基本真実を例証する役割を果たしたにすぎない。彫刻、建造物、壺絵といった証拠品は、もちろん大きな価値をもつのだが、それはしかし、詩人たちの口からすでに述べられた「理想」の表明体として研究されるのでなければ、信頼に足る情報を与えてくれないだろう。あの時代のギリシアにおける「社会変化」を幅広く歴史的に説明しようとして重要な諸都市に生じた主要な出来事を辿ろうとしても、それらは、ごくわずかしかられていない。われわれの手で復元できる唯一の完全な像——これにも如何ともしがたい隙間はある——となると、さまざまの書物に表明された「ギリシアの心性」の發展像を描いてないのではあるまいか。テオグニスとピンドロスは、異なつた仕方、こうしたプロセスに対するこの上なく重要な証拠類をしっかりと提供してくれた（パッカスの信女たちの口にするコロスの詩は、かなり最近に発見され、以前にはほとんど知られていなかったが、これも、ピンドロスの証言が——たとえ僅かであつても——十分であるのを端的に示していた）。ともあれここでは、テオグニスを最初に取り上げるとしよう。かれは、二人の内ではおそらく年長で、しかも、この期間における貴族階級の危険な社会状況をしっかりと描いていたのに、ピンドロスはむしろ、この階級の掲げる宗教的信仰や人間の特性の理想等々を描いていたからである。

広く伝播したテオグニスの詩

何はともあれ、まず最初に論じなくてはならないのは、テオグニスの作とされる詩集がどのようなプロセスを経てわれわれにまで伝えられたのか、であるだろう。この難問については、しかし、ほとんどすべての局面がすでに論じられていて、ここではだから、この本（『バイディア』）で採択されるであろう観点を解説し、しっかりと弁護しておかなくてはならない。とはいえそれは、それなりに面白いものの、基本において、言語学上の問題であり、ゆえに、テオグニスの詩集が伝播していく様を調べたなら、ギリシア文化のそうした固有の領域——後続世代に向けた当人の影響とも関わった——の歴史がいつそう深く理解されるのではないなら、ここで、あまり事細かに考察するには及ばないのかもしれない。

テオグニスの名の下に——まったくの偶然によって——伝え残されてきた奇妙な詩集は、実際には、早くも前四世紀に『目下の姿』で目にされていたにちがいない。現代の学者たちは、ここにいう詩集の構造分析に多大の労苦と思索の汗を費やしてきたが、そのような分析は、アレクサンドリアにおける考証作業の『試練の火』をとうてい潜り抜けられなかったように思われてならない。当の詩集は、前五世紀と前四世紀の宴席でしばしば用いられたが、そのような饗宴自体——かつてはギリシアの政治生活で重要な主役を務めていた——が中止されるに及んで徐々に世から忘れ去られ、次の時代には、単なる『文学的な骨董品』にまで成り下がった。この詩集は、実のところ、前七世紀から前五世紀にいたるあらゆる時代のさまざまな詩人による格言類や詩句等の『アンソロジー（名詩選）』と呼ばれてよいけれども、中軸をなしたのがテオグニスの詩から構成された一卷であったため、当人の作とされたのだった。そのような詩集から選り出された詩は、宴席で、フルートの音に合わせ

て高々と朗詠された。本来の用語はくり返し改変され、はたまた削除されて、そこから見て取れるのは、どれほど高名な詩であったも、いかにしばしば『朗詠に携わる者たち』の手で変形されたかにちがいない。選り出された詩には、しかしながら、前五世紀——ギリシアの貴族階級が『政治的要因』であることを終えた——以後のものは一つとして含まれていない。いわゆる『テオグニスの巻』は、明らかに、主として貴族階級のサークルで生き残った。そこにみられるテオグニス自身の詩片ばかりでなく、他の多くの詩にもデーモス（民衆）への激しい憎悪が溢れ返っていて、ゆえにこれらは、クリティアス時代のアテナイで貴族的な政治集団——アテナイの体制をめぐる老寡頭家（『クリティアス』）の小冊子を生み出し、プラトン当人も血統的に強く結びついていた——を舞台として朗詠された、と想像するのが最も理に叶っているのではないだろうか。プラトンの手になる『饗宴』という対話篇では、エロースと饗宴の結びつきがこの上なく見事に描き出されているけれども、そのような結びつきは、テオグニス詩集の歩みにも明らかに映し出されていた。この詩集の第二巻として世に出ている作品——さまざまの詩が一貫性を欠いて寄せ集められていた——は、こうした饗宴で常に崇拜された『エロース』の賛美に捧げられていたからである。

テオグニスの詩を、他の作家たちや他の時代のそれから切り離そうとする場合に、ひたすら『文体』にのみ頼らなくてよいのは幸運といえるかはない。かれの詩集の多くの部分は、有名な詩人たち——その作品が今も残っている——の詩、あるいはその断片である、と即座に判別できたし、他の部分も、多少とも確かな証拠でやはり判定できたからである。テオグニス当人の巻を最初に据えたなら、その構造を手掛かりに、この巻とそれを真似て他の詩人たちが作成したもの——バラバラに寄せ集められた抜粋の束——を仕分けるのは、そう難しいことでもない。かれ

の巻は、一貫した詩というよりは、格言の集まりに近く、もっとしつかりまとめられていたなら、他者の作品など混ざり込む余地はなかったにちがいない。もっとも、まともにはルーズであつても、内なる一貫性はきつちりと保持されていた。この巻を構成している短い断片の各々は、いささか統一性に欠けたものの、それら全体を貫いて一本の思考の糸がそれなりに走っていたし、プロローグとエピローグを介して詩集の残余の部分から切り分けられていたからである。ところで、何をもちつてテオグニスと真作か否かを識別すべきなのだろうか——この場合の「基準」に採択されてよいのは、無愛想なユンカー（地主貴族）特有のまごうかたなき「自負」の色調であり、さらには、ほとんどすべての文章のはじめに繰り返される「キュルノスへの語りかけ」であるだろう。よく似た「語りかけ」のスタイルは、実の弟のペルセスに向けたヘシオドスの教訓詩や、イアンボス調の詩人たちの作品、サッポーとかアルカイオスの抒情詩などに目にされるにちがいない。テオグニスは、みずからの教えを公表するにあたり、統一性を欠いた一連の格言を用いたので、かれの巻のいづこにも「キュルノスよ！」とか「ポリュパオスの息子よ！」などの語りかけが——あまねく公理のはじめを別にすれば——何度もくり返されている（ちなみに、ポリュパオスの息子キュルノスは、テオグニスと深く愛した貴族の若者で、その助言はすべからずこの若者に向けられていた。これと同じ「しきたり」なら、初期の北欧の教訓詩にも特徴的に認められ、語りかける相手の名が、そこでも何度もくり返されている。テオグニスにみる「キュルノスへの語りかけ」は、それゆえ、まことに確かな「主要手掛かり」ともいふべく、詩集の残余に当人の真作を識別するにあたり心を安んじて寄り掛かれてよいのである。

そのような「キュルノスへの語りかけ」が目にはされないのは、本来の一卷を構成してエピローグで幕を閉じる詩においてだけで、その他の箇

所では、そこそにしつかりと顔を覗かせていた。もっとも、とりわけ頻繁に目にされたのは、テオグニス自身の格言集の全体に互つてであり、これに比べると他の箇所での登場など稀有に近く、ごく狭い範囲に集中されていた。だからこう結論されてよいだろうか、「キュルノスへの語りかけ」が目にはされる詩は、テオグニスの作品の本体を別にするならば、さらには贋作も別にするならば——かつては当人のいつそう完全な詩集であつた作品からの引用にちがいない、と。そのような詩のいくばくかは、実のところ、かれの巻の境界内でも境界外でも等しく目にされ、もしも単一の詩選集を想定したならば、そうした繰り返しなどありうべからざるものと考えられなくてはならない。それゆえ明らかに、詩集の後半部は元々は独立した詩選であつて、そこには、テオグニスの詩句に加えて他の詩人たちのそれも詰め込まれていた、と考えないわけにはいかな。この詩選が編まれたのは、テオグニスと「古典詩人」の評判を固めていた時期——遅くとも前五世紀の終わるか前四世紀のはじめに向けて——であつた。プラトンははつきりとこう語っている、この種の詩選は、当時の学校で教科書に用いられていた、と。それはさらに、数々の宴席でも重用されたにちがいない。もっと後になると、これらの本——プロローグとエピローグを具えた元々の「テオグニスの格言集」+「他の詩人たちの詩句」からなる詩選——は互いに混ぜ合わされて、われわれの手にしている単一の詩集が出来上がった（ここにいう「混ぜ合わせ」がいかに無神経になされたかは、そこでの繰り返し返しがたとえ目にとまっても、取り除こうと惜しまずに汗を流した人間など一人もいなかった、という事実からも明らかにならぬ）。それゆえ、テオグニスを評価するにあつては、互いに深く関連し合つた「格言の巻」ばかりでなく、これに続いて詩選のあちこちに登場する「バラバラの断片類」にも目を配らないわけにはいかない。そうはいつても「キュルノスに語りかけた」格言の数々

は、その他のすべてが依拠している基盤にほかならなかったから、まずは、これらの詳しい研究から出発すべきであって、詩選に残された他の断片類からテオグニスについてどれほど多くを学ぶことができるか、については、そのあとで問われるべきなのである。

ところで、「キュルノスに語りかけた」箇所はテオグニス本人の手でまとめられた、などと語られているけれども、これはしかし、どうして知られるのだろうか。かれの名も、多くの他の詩人たちと同じく、ここにいう詩集から当然に消え去っていったはずである。普通一般に、人気のある宴席歌の著者は、みずからの著作権をほとんど永続できなかったが、テオグニスは、文体に特別な工夫を施して作品の著作権を誤りなく示す「しるし」を付けていた。すなわち、詩集のプロローグを介してみずからの名を後代にまで伝え、かくして、みずからの不滅を確信したばかりでなく、作品のすべてにみずからの刻印——本人の言葉を借りるなら「しるし」——を押したのであった。以下に、かれ自身の言葉を引用してこう、「キュルノスよ、わたしの「しるし」は、これらの詩に巧みに施されなくてはならない。そうすれば、たとえ盗まれようと露見しないわけはなく、さらには、すぐれた詩が手元にあるのに、まずい詩を（わたしの作として）手にする者もないだろう。そして、誰もがこう口にするにちがいない、「これらこそ、メガラの人テオグニスの詩であって、かれの名は、あまねく人びとの間に広く知れ渡っている」と。とはいえ、同胞市民をすべからず喜ばせるのは、わたしの力の及ばないところであって、これ自体は、ポリュパオスの息子よ、なんら驚くにはあたらない。偉大な神ですら、雨を降らせたり、あるいはこれを差し止める時には——なるほど一方は喜ばせても、他方はそうならず——とうてい万人を喜ばせるわけにはいかなのであるから」。

これらの言葉に表明されているのは、高度に発達した芸術家の使命意

識と、みずからの著作権を擁護しようとする強い思惑にほかならない。そうした点では、これらの言葉は、当時はじめて壺絵や彫像に登場した「署名」とも対比されてよいかもしれない。個人の業績をこのように強調する姿勢は、時代精神が、本人に自覚されていた以上に深く本人に働きかけていたのを示しているだけに、これを、テオグニスにお定まりの貴族的性格に跡付けていくのは、わけても面白いにちがいない。「しるし」を刻み込むことで、かれが意図したのは疑いもなく、みずからの名をみずからの詩に合体させることであつた。というのも第一に、「しるし」が伝えるのは持ち主の名（ないしは工夫）であつて、しかも第二に、みずからの詩に「しるし」を付けるといふ計画の公表は、そのまま、みずからの名の公表を意味したからである。いうまでもなく著者が、みずからの作品の冒頭にその名を記すという慣習は、まったく新しいというわけでもなかったが、『神々の系譜（テオゴニア）』の導入部でヘシオドスが用いたこの具体例は、ほとんど真似されることもなく、ただテオグニスの直接の先輩にあたるミレトスの格言詩人ポキュリデスのみが、みずからの格言にその名を記したにすぎない。その理由は明白で、かれ固有の詩句は容易に、作り手の名を欠いた「匿名の格言」として広く世に流布する危険性を孕んでいたからであつた。にもかかわらず、ポキュリデスやテオグニスの手になる有名な詩句のいくつかは、のちの著者たちの手で「匿名の格言」として引用されている。ポキュリデスの詩句は、わけてもこの危険に晒されたが、それは、これらがバラバラの格言であつて一貫した思想の線でしっかりと結び合わされていかなかったからである。ゆえにかれは、そうした詩句の各々にみずからの名を付した。かれの二行連句の第一行は、つねに「ポキュリデスはこうも語った、すなわち……」で始まっている。ペイシストラトスの息子ヒツパルコスは、このセリフをそのままに真似て、アッティカの幹線道路に立てられたヘルメス像の

数々に刻むべき格言を書き上げたが、そのような格言の各々は「ヒッパルコスの記念碑」という言葉ではじまり、次いでこう記されていた、「友との誓いを守るべし」あるいは「正義の中を歩き続けるべし」と。テオグニスの場合、これほど遠くまで歩を進めるに及ばなかった。すでに見てきたようにかれの作品は、多少とも繋がり合った全体をなし、その全体はこれまで、解体も妨害も蒙らないで保持されてきたからである。これこそ、貴族階級に受け継がれた教育的知恵にほかならない。かれは、プロローグとエピローグで直接に語られているように、みずからの作品に盛られた知識が「陸と海の双方を超えて、あまねく世界全体に」伝播することを切に期待した。わが作品に対する権利を守って、そこに盛られた教えを擁護するには、みずからの名を冒頭に乘せるだけで十分であった。これ自体は、当時に新たに発見された「散文」という領域で、あまねく著者たちに用いられていた様式にほかならない。現代の作家なら、このように用心するに及ばない。かれの名とその本のタイトルは、ともに表紙に印刷されていたからである。しかるに前六世紀の末には、どの本も表紙をもたず、それゆえ唯一つの解決策は、ヘカタイオスが用いた——もつと後にはヘロドトスやトゥキュディデスも用いた——工夫、すなわち本の冒頭にみずからの名と、この本を書くに至った意図の双方を載せるといった手しかなかった。ヒポクラテスの名を冠して伝えられた医学書には、個々の著者の名は一つとして記されず、ゆえに、各々の論文の著者が誰でどうした人物であったかを特定する手立てはまるでない。『しるし』を付けるという工夫は、詩の分野では、散文にみられたほどの人気を博さなかった。そうした工夫は、上に紹介した実例を別にするなら、あくまでも前五世紀の音楽的しきたりにしか目にされない。そこでは、詩の終わりに近い節——詩人の手でみずからの名が記される——が「しるし」と呼ばれていたからである。このような試みは、果た

してテオグニスから借り受けられたものか否か——この点は、今のところ答える術がない。

テオグニスの作品は、書かれてのち数世紀の間にさまざまの浮沈を蒙ったから、世の学者たちは最近、こう仄めかすに至っている、当人は、個々の二行連句のそれぞれに『しるし』を施せなかったら、おそらく、それへの著作権を確保できなかったにちがいない、と。ここにいう『しるし』は、それゆえ、呼称の「キュルノスよ！」なのだと端的に考えられてきた。これは、まことに結構な理論というほかはない。それを介してわれわれは、ある二行連句が真作か否かを即座に、まさしく自動的に、しかもかなり客観的に決定できるように思われるからである。こうした基準を欠いたなら、問題の全体は、たえず入り組んで不確かなものとなるにちがいない。テオグニスはしかし、みずからの作品の写しがたった一つしか残らなかつたら、死後のおよそ三千年にわたって世の学者たちを悩ましたはずの『難問』をほとんど見越すことができなかつた。これはしかも実際に起こって、われわれの手にするテオグニスのテキストは、たった一つの古えの写本しかない。かれは、みずからの作品が数千年も生き残るのはさすがに期待しなかつたが、万人の手元に常に置かれているのだけは強く希望した。だから、死んでから一世紀もすると、その作品が情け容赦もなく短縮され、詩選に組み入れられ、ついには多くの匿名作家たちの詩に添えられて食卓用の詩歌本にまとめられる運命にある、などと予想できなかつたのである。わけでも予想できなかつたのは、詩の序文にみずからの名を編み入れた際、そうした工夫が剽窃行為を防げないばかりか、詩選をまとめる上で付加された無名の詩のすべてに『わたしの父親はテオグニスです（＝当人の自作です）』と言わせるに至った点であった。それでも感謝されてよいのは、作品の冒頭に記された当人の名という『しるし』に助けられて、われわれが、他の詩人たちの断片類

に覆い隠されている本人の「人となり」をそれなりに呼び出しようとする点に
ちがいない。だから、詩選に登場する他の作家たちの誰かを同様に呼び
出そうとしても不可能というほかはなく、テオグニスとは、その限りにお
いてみずからの意図を十分に達成したといえるだろうか。

とはいえ内的な理由から、キュルノスへの語りかけに課せられたの
は「しるし」の役割でしかない、などと考えることはできない。キュル
ノスの巻をさらに詳しく研究すると、キュルノスに語りかけられた格言
と、その他の格言がいつそう区分し辛くなるのは一目瞭然で、それらの
格言はすべからず一貫した思考系列に配されていたからである。ここに
はしかし、常に危険が潜んでいて、われわれは、旧来の格言の巻に含ま
れていてもテオグニスの手にならない作品の類いを、キュルノスの名を
含んでいない詩の中に受け入れ兼ねないだろう。実のところ、エピロー
グの直前には——それゆえテオグニスの真作を画する境界内に——ソ
ロンの手になる詩が登場していた。この詩はしかし、思考の繋がりを途
方もなく乱すことから、たとえ他の資料に「ソロンの作である」と耳打
ちされなくとも、テオグニスらしい作品とは係わりを持たない、と判断
して遠慮なく放逐できた。このような問題にせよ、あるいはそれ以外の
問題にせよ、各々の詩の自身と様式を事細かに研究・吟味しないなら、
とうてい解決できるものではない。そして、目下のところ広く是認され
ているのは、キュルノスの名ですら——わけでも格言の巻の境界外では
——当の詩がテオグニスの真作であることを絶対的に保証するわけでは
ない点なのである。

それゆえ、テオグニス像を造り上げようとすれば、原則的に「キュル
ノスへの語りかけ」の巻全体に依拠しないわけにはいかない。この巻に
は、かれの「人となり」がわけても滲み出ていたからである。おまけに、
これらの「語りかけ」に続いて詩集に登場するバラバラのキュルノス格

言に依拠しても、いくばくかの特徴は加えることができるかもしれない。
もつとも忘れてならないのは、そこでの作業が「手さぐり」な点で、わ
れわれは、テオグニスの「語りかけ」を一つにまとめていた思考の特質
を復元できず、ゆえに、バラバラの格言の価値もはなだ減じられない
わけにはいかない。これらの格言詩はテオグニス自身の巻に属さず、キュ
ルノスに語りかけられてもいないので証拠として用いたいのではない
か。テオグニスの手になるものと、他の詩人たちのそれを明確に区分で
きないからである。とはいえ、或るメガラの詩人の手になる一連の美し
い詩句には、特別に言及されてしかるべきかもしれない。これらの詩句
はどうやら、プロローグから抜粋されて独立の詩にまとめられたようで、
一般にはテオグニスのものらしいと考えられている。そこには、酒宴の
陽気さが——ペルシアの侵攻という危険に脅されて塞ぎと怯えが色濃
く漂っていたにしても——満ち溢れていた。これらを書いたのがテオグ
ニスとすれば、当人は、前四九〇年まで——あるいは前四八〇年にすら
——生存していたことになる。けれども、メガラの内政をめぐって今日
に知られている数少ない情報に依拠するなら、「キュルノスへの語りか
け」は、これよりもかなり先に位置づけられてしかるべきかもしれない。
そこに記述されていたのは、前六世紀中葉のメガラと思われるからであ
る。古えの学者たちはこう考えた、テオグニスが生きて活動したのは前
五四四年ごろであった、と。そのような供述の真偽を確かめる術は、不
幸にしてわれわれの手元がない。ペルシアの侵攻に言及した詩句は、い
ずれにしてもわれわれの役に立ってくれそうもない。とはいえ、そこに
盛られた精神は、キュルノスの巻に漂っている精神といささか質を異に
しているようにも見受けられる。そして、これらの詩句の著者が、テオ
グニスの作品を扱うやり方から推して、当人に続く「第二のメガラの詩
人」であるといった大胆な仮説も、どうやら一般に考えられてきたより

も、可能性は薄くない。かもしれない。もっとも、これらの詩句とテオグニスとのプロローグが一致するのは、わずかに二点のみであるから、そのような仮説は目下のところ、ありえなくはないが、かといって十分な証拠に基づいているわけでもない点を認めないわけにはいかない。

貴族社会の教育的伝統を成文化する

「キュルノスへの語りかけ」という体裁をとったテオグニスの巻は、構造の上で、ヘシオドスの『仕事と日々』やポキユリデスの格言集と、その種を同じくする。のではないだろうか。これ自体は、世にいう「ヒュポテーカー（教え）」の集まりだったからである。この言葉（＝ヒュポテーカー）は、プロローグの終わりに——それも格言本体が始まる直前に——その顔を覗かせている。テオグニスはこう口にしていた、「キュルノスよ、お前に親しみを込めて教えようとしているのは、いまだ年端もいかぬ少年であったわたしが、貴族たちから学んだ事柄なのだ」と。それゆえ、かれの教えで中心的な点は、それがテオグニス自身の発想でなく、当人の属する階級の伝統であった点なのである。貴族階級の文化や訓練の原則を、詩にまとめようとした初期の試みには、以前の章でも触れておいた「キロン（教え）」があった。ミレトスのポキユリデスの金言が意図しているのは、生活上の行為に対する一般的指南なのである。テオグニスにみる新しい姿勢は、一方にポキユリデスの仕事を、他方にヘシオドスのそれを置いて対比するなら、わけでも意義深いのではないだろうか。かれが目ざしたのは、貴族階級の教育が奉じる原則をすべからず解説することであった。これらの神聖な教義は、かれの手でまとめられる以前、父から子へと、口移しで伝えられるのみだったからである。かれの仕事はだから、農民階級の知恵に含まれる原則の成文化に汗

を流したヘシオドスに、意図的に対応させられてよいかもしれない。

諸々の詩句が語りかけるキュルノスという若者は、エロスの関係でテオグニス当人と強く結びつけていた。詩人ははつきりこう考えている、キュルノスとの教育関係の基盤にあるのは、この絆（＝エロスの繋がり）を措いてないのだ、と。この絆はそして、双方が属した階級の目には、総じて成人男性と少年を、比類のないカップルに仕上げるものと映っていた。そもその最初、ドーリアの貴族階級を詳しく研究する機会に恵まれた折に、かれらの性格を支配する主動因が、同性愛にあったのをしっかり目にしたけれども、これは、まことに意義深いことであった。ここではしかし、この現象を——今日では鋭い論争の主題となつていもの——取り上げるには及ばない。この本（＝パイディア）の狙いとするところは、社会を、まさに社会のために、記述する点にないからである。そうはいっても、ギリシア人の精神生活に、同性愛がいかに重い位置を占め、どれほど深く根を張っていたかについては、しっかりと指摘しておかなくてはならない。そして、成人男性の若者ないし少年への愛が、初期ギリシアの貴族社会では本質的部分をなし、そこでの道徳的・社会的理想と解きがたく結び合っていたのも、しっかりと認知されなくてはならない。そのような同性愛は、とりわけ、ドーリア風の、少年愛と呼ばれていたが、この言い回しがいかに正しかったかは、そのような実践がイオニアやアテナイの民衆感情にそぐわないで、いつも、大なり小なり縁遠いものに留まっていた——アッティカ喜劇にはこの点がわけても示されている——ことから明らかにちがいない。支配階級の習慣は、おのずと裕福な中産階級に受け容れられ、後者の間に、パイディオス・エロース（少年愛）が広く流布していった。とはいえ、そうした少年愛を受け容れて称賛するアテナイの詩人や立法家たちは、ソロン——かれの詩では少年愛が、スポーツや異性愛に比肩されてよい人生におけ

る最良事の一つなのだ、と称えられている——からプラトンにいたるまで、その大半が「貴族主義者」であった。ギリシア全土の貴族主義者は、ドーリア貴族の感化をきわめて強く受けていたのである。そうはいってもギリシア人は、古典期に入ってから、広く普及した同性愛行為の道徳性をめぐり、実際にはさまざまに意見を異にしていた。この行為は、特定の社会・歴史的伝統と深く結びついてきたからである。このような観点に立ったなら、国民の大多数が「同性愛」を軽蔑した——あるいは追放した——にもかかわらず、他の社会層ではこれ自体が成長を遂げ、ついに——少なくとも男性にとつて——道徳的高尚や精神的完成といった最高概念とも肩を並べるに至ったのは何故か、もはるかに理解し易くなるのではないだろうか。

結局のところギリシア民族は、肉体的武勇と精神的調和こそ、人間の到達しうる「最高善」にほかならないと考え、数え切れない歳月に互つてこれらを称賛し、尽きることのない競い合いの中で心と身体の両面でのエネルギーを最大に投入しながら、これらを、できる限りで最高に完全なものにまで仕上げようとせつせと汗を流してきたが、そうした民族の中に、ではいかにして、堂々とした肉体とバランスのとれた魂への情熱的な称賛が生まれ育ったのか——この点は、結局のところたやすく理解できるにちがいない。羨まれるに足るこれらの特質を十分に具えた人物に強く惹かれる人びとは、実のところ、一つの理想——アレテーへの愛——に激しく動かされていた。男性間のエロスで固く結ばれた愛人たちは、いつそう深い名誉の感覚に守られて卑しい行為に手を染めることもなく、ひいては、いつそう気高い衝動に促されて名誉ある振る舞いにも向かった。そのようなエロスをわざわざ「アゴゲー（教育）」の因子——それも重要因子——に用いたのは、スパルタという国家であった。愛する側と愛される側の関係には、親と子の関係にも似た一種の「教育

的権威」が具わっていた。むしろ前者は、当の若者が大人の仲間入りを控えて、家庭の権威や家族の伝統といった拘束の数々を脱ぎ捨てはじめた年代にあれば、多くの点で父の権威を凌いでもいた。エロスの教育力は、これまでも数限りなく口にされて疑うことができず、プラトンの『饗宴』など、さしずめその頂点にちがいない。貴族主義者であったテオグニステオグニスの教育論に靈感を吹き込んでいた当の力は、それゆえ、こうしたものにほかならない。そのような力のエロスの局面は、この力をもつ燃えるような道徳的熱意に比べると得てして見落とされがちだが、かれの作品の終わりには、苦しいほどに激しい口調で次のように叫ばれている、「キュルノスよ、陸と海を越えて大きく飛翔できる翼を、わたしはお前に授けてやった。．．あまねく祝祭や宴席で、お前は、多くの客人たちの口の端にのぼり、愛らしい若者たちが、笛の音に合わせてお前の名を美しく歌い上げるだろう。そして冥界に赴いたあと、お前の名は、なおもギリシアの地や島々を歩き回って、大地と太陽の存続するかぎり未来の人びとに歌い継がれるにちがいない。とはいえわたしは、お前の尊敬を得ていない。お前は、わたしに話しかけて幼い児のように欺くのであるから」と。

貴族たちの宴席は、エロスの力に統治されて厳しい「良風美俗（エウコスミア）」を保っていたが、これ自体は、長年に及んで揺らぐことなく存続した。それでもテオグニステオグニスの時代に入ると、さすがに変化が目に見えるようになった。貴族階級が、僭主政の迫りくる脅威に抗して、あるいは一般民衆の勃興する力に抗して、みずからの地位を守るべくどのような戦わなくてはならなかったかは、ソロンの詩からも十分に伺われたのではないだろうか。ソロンの手で描き出されたのは、貴族たちが狭くて排他的な一団をなし、その政治的支配権によって無益な失政を招いた揚句、抑圧された大衆が、国家に対して危険で法外な要求を押し付けるに

至った光景にほかならない。こうした形で引き起こされた危機は、ソロンを促してみずからの政治道徳体系を築かせたが、当人は、これに訴えて両極端の「中庸」をしつかりと維持し、僭主政から国家を守りたかつたのである。テオグニスの詩句も、そのような階級闘争が激しさの極を迎えていた、と保証している。かれの作品の冒頭にはかなり長い詩句がいくつか目にされて、それらは、社会の状況全体を興味深く照らし出していた。最初の哀調詩は、その様式、構造、情感の点で明らかにソロンの詩をモデルに仰いでいたが、重要な差もおのずと認められた。ソロンの場合は、みずからが貴族主義者であったものの、属する階級の長所と同じくその欠点も十分に見抜いて、これのゆえに当の階級を厳しく咎めたのに対して、テオグニスの場合は、みずからの都市に満ち溢れていた不安と不正の責めを負うべきは、ひとえに貴族階級に敵対する連中のみであると主張して憚らなかつたからである。メガラの状況は、明らかに、古い地主貴族に不利な方へと展開していた。テオグニスはこう口にして、指導の任にある連中は、正義をねじ曲げて人びとを台無しにしている。かれらは、金銭にひたすら貪欲でいつそう大きな力を手に入れようと血眼になっているのだ、と。だからこうも予言するのである、目下のところ都市を包んでいる平和も、つまるところ「内乱」で幕を閉じ、それに続いて僭主政に落ち着くほかはあるまい、と。これを矯正する唯一の策は、かれの知るところ、国家が「古い体制」に立ち戻って貴族階級の手に「正当な特権」が返還されることを措いてない。もともと、そのような矯正策はどうてい実現できないように思われるのだが……

第二の詩句には、次のような陰鬱きわまる映像がまとめられていた。「都市は、なおも同じ姿を留めているが、そこに住む人びとは変質してしまった。キュルノスよ、正義と法をまるで知らず、使い古された山羊の皮であれば骨を覆い、野生の鹿のように都市の外に起居する連中が今や

貴族であり、反対に、かつて貴族であった面々は、今や貧しくて惨めな境遇に身を晒している。見るに堪えない光景だ！ 目下の貴族連中は互いに嘲り合い、欺きあって、そもそも何が気高くて何が下劣なのかを告げてくれる。「確たる基準」をまるで知らない。かれらには「伝統」というものが無いからだ。このような市民たちを、キュルノスよ、いかなる場合にも真の友に選んではならない。かれらのいづれにも親しみを込めた言葉は口にすべきだが、かといって、まじめな意図を込めて交わってはならない。お前は、これらの惨めな連中の「人となり」を学び取って、当人たちが何事においても信頼に足らないのを目にするだろうからだ。まことに度し難いこれらの連中が深く愛するのは、裏切り、詐欺、陰謀を措いてほかにない」。

ここでの詩句に記録されているのは、私的な憎悪と軽蔑のみで、それゆえ、どうしても抑え切れない「義憤」などではない——およそこのように考えたなら、とんでもない間違いを犯すことになる。こうした詩句を最初の哀調詩に結びつけたなら、そこに浮かび上がってくるのは、次のような点にちがいない。正義こそはあまねく社会秩序の基盤である、というソロンの教義をコメントしたここでのテオグニスの解釈は、まことに狭くて階級的な制約を脱し切れていなかった、と。そうはいっても、古い支配階級が今や打ち倒されて見る影もないところから、国家の全体に及ぶ「普遍的な正義」というソロンの理想にしがみついて離れない切ない姿をここに思い浮かべたのでは、あまりに「やり過ぎ」というものだろう。公平で偏りのない観察者ですら、次の点は認めないわけにいかないからである、悩める貴族がこうした理想に訴えたからこそ、当人のポリス像も、真の詩を特徴づけるあまたの情念的激しさを手にできたのだ、と。ここにみられる高尚な哀歌様式には、新たな力が生き活きと漲っていたが、それらはすべてテオグニス、イアンボス調の詩人たちから

借り受けた「罵りのリアリズム」に源を仰いでいた。もつとも、不正の支配する世の中のリアルな描き出しは、ソロンの偉大なイアンボス詩をいくらかは手本に仰いでいたが、いつそう強く影響されたのはおそらく、ヘシオドスの『仕事と日々』からであった。テオグニスとは、その作品をまとめるにあたり二つの主要部分をプロローグとエピローグで繋ぎ合わせたが、これは、ヘシオドスの様式にほかならなかったからである。ヘシオドスの模倣は、ただ単に詩の構造面に限られたわけではなかったが、それも、双方の精神的状況や見解の類似性を考えると、そんなに理解できないわけでもない。『仕事と日々』でヘシオドスを駆り立てたのは、財産問題をめぐって実弟のペルセスと論争する中で、農業従事者の道徳規則全体を——その一般的総論から各論的应用に及んで——しっかりと描き出すことであった。かれの詩は、それゆえ「正義の問題」に焦点づけられている。これと同じくテオグニスを駆り立てたのも、社会革命を知的に嫌うがゆえに貴族階級の道徳性をしっかりと解説する営みであった。双方の作品の第一節に生命を吹き込んでいるのは、不正の手で事態が歪められることへの「激しい不満」にほかならず、双方の詩人が、いくつかの長い論を介して展開したのもこれを措いてない。双方の際立った対応は、テオグニスの作品の第二部に目を向けたいっそう明らかではないだろうか。これ自体は『仕事と日々』の第二部を、明らかなモデルに仰いだ短い金言の集まりだったからである。そのような対応関係は、テオグニスの作品の後半部にいくつかの長い句片が目なされて、三、四の二行連句と短い内省的哀歌詩を繋いでいたからといって阻害されるわけではない。正銘のアルカイックな作法に則って、双方の詩人は、みずからの個人的状況と目下の必要に導かれつつ普遍にして妥当な真理を口のできたのである。テオグニスの作品の二つの部分は、結果的に芸術面でのバランスを欠いていたが、それもつまりは、情緒的高まりを個人的

に表出する頻度が増したからにほかならない——現代的な心にはこのように映ったが、そこには、次のような過ちへの「陥穽」が口を開いていた。すなわち、ここにみる「個人的情感の自由なつぶやき」は、あくまでも普遍的なまじりや考えられてよく、ゆえに、詩全体も「個人的なつぶやき」と解されて構わないのだ、と。しかるにそれが意図していたのは、客観的真理の表明以外の何ものでもなかった。

かれの作品の第一部にその顔を覗かせる二番目の哀調詩は、これに続いて登場するあまたの道徳的金言がそもそも何をテーマとしていたか、を明かしてくれるにちがいない。今現にメガラを支配している階級は、テオグニスも口にするように、途方もない不正と不実に塗れているが、それも宜なるかな、この階級には何が気高くて何が下劣なのかを判定する基準がまるで具わっていないのだから——これこそ、まさにそれであって、つまるところ、キュルノスの心に刻み込まれた事実にはほかならない。そうすればこの少年は、真に気高い自己規制と振る舞いを身に付けて、みずからを「大衆」の同列になど据えないだろうからである。そのような基準を手に行けるのは、たしかに「伝統」を身に付けた者を措いてない。その伝統は、不滅の文言に訴えてこれを表現できる者の手で行く世界に向けて広く擁護されなくてはならないが、これが、まさに今なのである。それが実現できたなら、当の伝統は、どうすれば真の貴族になれるかの「方途」を育ちのよい若者に提示できるにちがいない。テオグニスは、若い弟子に警告して「悪しき人びと(つまりは「カコイ」や「デイノイ」)とは交わらないように、と訴える。ここにいう「カコイ」や「デイノイ」は、貴族的訓練で育てられなかった人びとのすべて——あるいは物事のすべて——を具体的に叙述したかれの用語で、一般には、すぐれた者たち(つまりは「アガトイ」や「エストロイ」)——テオグニス自身の仲間の元でしか出会えない——の対極に置かれている。このよ

うな二分法は、かれの主要テーマの一つであった。かれは、作品の最初の箇所、みずからの階級が「父祖伝来の教義」として掲げるものを扱ってみたいと告げた折にもこれを「原理」に据えているし、もつと後にも、あまたの金言の冒頭でこれを繰り返していたからである。みずからの意図を述べた箇所と具体的な金言を披瀝した箇所の間には、政治に捧げられた箇所がしっかりと挟まっていた。この箇所は、悪しき人びとの墮落ぶりをわけても暗い色調で描いて、それゆえ「すぐれた人びとと交わって、悪しき人びとに係わってはならない」と命じるテオグニスに訴えに、事実に根拠を与えていた。かれの教えの全体は、すぐれた人びとと交わるように」と訴える際にそもそも何が意味されていたか、を具体的に例証しているのではないだろうか。当人は、本当の意味での貴族階級の権威に訴えて、若い同胞貴族に「真理」を教えていたからである。

ところで、テオグニスの思索の行程を最後まで辿ろうと思うなら、かれの作品の第二部に登場する金言の集まりの全体に及ばなくてはならないかという点、必ずしもそうではない。かれが記すあらゆる言葉、かれが下すあらゆる命令には、特有の力強さと緊急感がたつぷりと漲っているが、その源はすべからず「迫りくる危機」にあつて、これについては、メガラの社会状況が紹介された折に切々と訴えられてもいた。かれは、延々と続く「グノーマイ（格言）」から出発したが、それらは若い弟子を戒めて、悪くて下劣な連中を友に選ばないように、と訴えていた。そのような連中は、まるで信じるに足りないからである。たとえ少数でもよい、面前ではAと語り、背後ではBと語るような二枚舌を用いない人びと、しかも、困った時には当てにできる人びとをこそ友に持つよう——これが、かれのアドバイスであった。世の变革はおしなべて、それまでの信頼や信用を途方もなく乱さないでは措かない。ゆえに、同じ政治的信条を奉じる人びとは互いに密に寄り集まるのだが、それも、裏切

り行為があまねく行き渡っているからにほかならない。テオグニス自身もこう語っていた、信ずるに足る人間は、政治的不和の時期なら「金の値打ちがある」と。これもまた古い貴族社会の規定なのだろうか……

そのような規定が「手本」に掲げていたのは、実のところ、テセウスとピリタオスの、そしてアキレウスとパトロクロスの友情であった。これらに代表される偉大な実例への敬い——これこそ、貴族教育のわけても古い要素にほかならない。しかるに今や、その階級も攻撃され打ち倒されるに及んで、よき実例と気高い友情はこの上ない価値をもつ、といった古い教義も姿を変えて「党派原理」に転じてしまった。古えの英雄たちの友情は、今や、同じ政治的「党派（ヘタイリア）」に属するメンバーが見習うべき友情のモデルとなったのである。このような決着はテオグニスに、教えを語るに際してそもそも最初の、友人を正しく選ぶことがいかに重要で、そのためには、友情の第一条件として当人の忠誠を存分に確かめなくてはならない、と訴えた事実にも照らしても、とうてい避けることはできないだろう。かれ自身はこれを、おそらくは両親から学んだにちがいない。貴族階級の抗争は、何年にも及んで止まなかったからである。ともあれ社会闘争は、古い貴族的な道徳規定の性格を一変させてしまった。どうやら時代が過酷であると人の心まで偏狭にならざるを得ないものらしい。社会闘争の勃発によつてそうした規定は、ソロンに代表される「階級を超えた新たな国家道徳」とは似て非なるものに成り果てたが、貴族主義者は今や、自分たちが国家の重要部分をなすと考えないわけにはいかなかった。かれらは、みずからの階級こそ国家の中の「聖なる国家」なのだと考えて、これの不当な転覆を嘆き悲しみ、その復活をせつせと画策したが、冷静な観察者の目には、そうした階級とても権力を求めて抗争をくり返し、「階級的結束」という生得感情に訴えて何とか崩壊を食い止めている単なる「政治党派」としか映らなかつ

た。悪しき交わりは避けるように！と訴えた古い命令は、今やその姿を変えて政治的閉鎖を求めるものとなった。かつての規定がこのように歪められたのは、つまるところ、貴族階級が弱体化したからにほかならない。友情の前提条件として「忠誠」——それがたとえ特定の階級への政治的忠誠であつたにせよ——とか「無条件の誠実」を要求する姿勢には、本当の意味での道徳価値があまり認められたものの、そこに強く表明されていたのは、何といつても政治的な「党派精神（エスプリ・ドゥ・コール）」であつた。この精神は、尊大にも政敵たちをこう非難したからである、「新たな連中は、微笑みながら互いに裏切り合っている」と。忠誠や無条件の誠実への要求は、ソロンの気高い国家理想に比べられるべくもないが、それでも「アガトス（優れた人間）」は、生まれの点でも行為の点でも等しく「優れて」いるはずだ、とひたすらに訴えて、そのひた向きさは否めないかもしれない。テオグニスはこの信じて疑わなかった、「貴族の身分＝気高い性格」という点こそわが階級の何よりの強みで、存亡を賭けた闘いにおける最後の防衛線にほかならない、と。

友情を結ぶ際にはくれぐれも注意深くあるように——テオグニスの教えはすべからず、この主張で染め上げられていた。社会革命は、かれとその階級を導いてこのような「守りの姿勢」を採らせたのだ。貴族階級はしかし、一個の「党派」へと発展していったが、その場合の党派を単純に「政治党派」とのみ考へてはならない。この階級は、みずからの階級を閉じて守りの姿勢に固まらないでは済まなかつただけなのである。この階級はそれまで少数派に属して、かつての支配権を取り戻す機会にも恵まれなかつたから、テオグニスは若い友人に警告して、現状を受け容れる際にはくれぐれも慎重に、と訴えながらこう語っている、「わたしを見習って「道の間」を歩むように心がけてもらいたい」と。この場合の「道の間」で意味されているのは、極端きわまる双方の陣

営からの攻撃に晒されてソロンがみせた英雄的抵抗でなく、あくまでもむき出しの攻撃的活動を——あるいは防衛的活動をすら——安全かつ巧みに避けること、なのである。キュルノスは、さまざまな友人に合せて自身の性格を変えらるという「底の深いゲーム」に長じなくてはならない。すなわち、あたかもタコのように、すがり付いた石の色に合わせ必要とあらばいつでも皮膚の色を変えられなくてはならないのである。テオグニスが奨めているのは、実に、大衆との生存を賭けた闘いにおける「守りの擬態」にほかならない。そのような闘いが道徳的に面倒なのは、それが、「表」でなく「裏」で展開されざるをえない点にある。テオグニスはしかしこう信じて疑わない、そのような状況下にあつても、気高い人間ならつねに「気高い」あり方を保たずには済まないはずだ、と。かれはこう考えるのも厭わない、気高い人間こそ「無知な大衆に対する砦であり塔である。もつとも当人は、それを崇められることもないけれども」と。このような要求を「矛盾だらけ」と評するには及ばない。これ自体が、貴族階級の置かれた立場からの必然的帰結と考えられてよいかからである。とはいえそれは、古い貴族的な倫理規定と大きく「質」を異にしていたけれども……

そのような要求を見渡してわけても目につく革命的な変化の一つは、改変されたアレテー観にちがいない。ここにみる改変は、革命の根本因——経済力をさまざまな階層に配分し直すといった——と密接に結び合っていた。古い貴族階級の地位は、領土という財をわが手にしている点に基づいていたから、新たな交換手段として「貨幣」が登場すると根底から揺さぶられないわけにはいかなかった。そうした状況には、政治的要因も囁んでいたのか否かは定かでないものの、はっきりしているのは、テオグニスの時代までに貴族階級が——少なくともその一部は——「食うや食わず」の境遇にまで身を落とす、替わって、富裕な庶民

層という新たな階級が身を起こして政治権力と社会的影響力を手にする
 ことになった点にちがいない。そのような経済的変動は、古い貴族的な
 アレテー観にはとてつもない打撃であった。このアレテー観はつねに、
 掌中に収められた社会的特権と生活上の外的財をそもその前提に据え
 ていたからである。これらを欠いたなら、たとえば「気前の良さ」とか
 「度量の大きさ」など貴族の面々に具わった多くの特性も、とうてい実践
 には移されなかつたにちがいない。ヘシオドスのセリフを借りるなら、
 素朴な農夫連中にとつてすら「富裕」は、掛け値なしのアレテーであり
 尊敬であつた。このセリフに明示されているのは、初期ギリシアのアレ
 テー観が「社会的に抜きん出ている」とか「大きな影響力を持つ」といっ
 た要素をかなりの程度、つねに含んでいた点にちがいない。

このようなアレテー観はしかし、新しいポリス道徳の衝撃の下に徹底
 して粉碎された。貴族階級のアレテーの理想が、あるいは攻撃に晒され
 たり、あるいは改変をこうむる——ティルタイオスとソロンがその好例
 ——時にはいつでも、当の理想がいかに「富（オルボス）」とか「アルト
 ス」と密接に関わり合っていたか、それゆえ、ここでの関係が壊れた
 際には生き残るのがいかに困難であつたか、が白日の下にさらけ出され
 た。ティルタイオスはこう宣言していた、市民のアレテー——スパルタ
 とメッセニアの交戦中は「兵士としての勇猛さ」が何はともあれこれに
 相当した——は富よりも、そして、貴族たちが重んじたあまねく「善き
 もの」よりもいっそう大きな価値を具えている、と。ソロンも、体制の
 整った国家における最高の政治価値ともいふべき「正義」について、や
 はり同じことを口にしていた。かれはしかし古い伝統に育まれたから、
 われに富——むろん「まっとうな」それ——を与えたままと神々に祈つ
 て、アレテーとか特権への願いは「富」を手にはじめて実現できる
 のだ、と考えていた。かれには、財産の偏った配分が神の意思に反する、

四〇

とは信じられなかつた。いわゆる黄金や領地のほかにも別口の富——溢
 れるばかりの生来の健康や生きる喜びなど——があるのを知っていた
 からである。もしも、アレテーか富のいずれかを選ぶようにと迫られた
 ら、かれは、迷うことなく前者を指し示したにちがいない。

ここにみられる積極的で、前向きな、大いに革新的ともいふべき発想
 を、テオグニスにみた女々しい落胆の姿勢——当人の口から貧困への不
 満と呪詛が尽きることなく漏れていた——と比較するのは、それなりに
 示唆的かもしれない。テオグニスはこう宣言していた、貧困は、人びと
 の生活に抗しがたい力を及ぼすのだ、と。かれ自身が当の貧困をみずか
 らの肌で体験していたのは疑う余地がない。けれども、貧しくあること
 を徹底して憎んでいたにもかかわらず、かれは、単なる富よりもいっそ
 う高次の基準（ないし願望的）の在ることを忘れないでいた。当人の信
 じるところでは、富すら、これのために進んで犠牲に供されるべきなの
 である。メガラの憎むべき成金連中をじつと観察したおかげで、物理的
 な「金銭」と精神的な「気高さ」がいかに両立しがたいかをしっかりと
 見定めて、かれは、こう認めないわけにはいかなかった、ソロンは、まっ
 とうな貧乏をむしろ好んだけれども、この貧乏にはそれなりの価値が
 あつたのだ、と。貧乏と裕福をめぐるテオグニスの姿勢にわけても明瞭
 に辿られてよいのは、古い貴族階級の奉じるアレテー観による評価付け
 が、社会・経済的変化という衝撃に助けられてどのように超えられていっ
 たか、のプロセスにちがいない。すなわち、テオグニスの掲げる理想は
 「力づくの改変」をへて出来上がっていたが、ソロンのそれは、みずから
 の精神の自由から生まれたのだつた。

テオグニスはこのように、ソロンが思い描いたアレテーと富の結びつ
 きに深い関心を寄せて、その深さも尋常でなかつたが、この点はあまね
 く詩にしっかりと映し出されていた。作品の第一部に登場する政治的哀調

詩は、ソロンの『エウノミア（良風美俗）』から豊かな靈感を得ていたし、いっそう短い箴言に顔を覗かせる詩句なら、同じくソロンの壮大な「ミューズたちへの語りかけ」からやはり靈感を得ていたからである。ここにいう「語りかけ」は、富と成功を手にしようと懸命に汗を流す人間同士の営みを、神の手になる天地万有の統治がいかに正しいか、という見地に立って考察したもので二つの部分に分かれ、それぞれが、際立つた対比関係にある二つの側面をくつきりと浮かび上がらせていた。テオグニスとは、ここに紹介された二つのテーマ（「神と人間」）を取り上げ、各々について独立の詩を書き上げたが、これを介して、ソロンの詩では二つの部分を結び合わせる「芯」ともいうべき、神から人間に向けた「道」の絶対的な正しさ、がどこかに消え去ってしまった。かれには、実のところソロンと違って、このように深い宗教的真理を莊嚴かつ客観的に扱う力量がなかったのである。神の力を確かめたいなら不正に獲得された富がそんなに長く栄えた試しはない、という事実を目を向けてみるがよい——こうしたソロンの第一思想に刺激されて、テオグニスは、かなり主観的な内省をくり広げた。かれは、むしろソロンに賛同したものの、こう付け加えるのを忘れなかった、とはいえない人びとは、邪さへの罰があまりにゆつくり訪れるため、ここにいう真理をしばしば忘れ去ってしまったのだ、と。このような言葉に跡付けられるのは、訴訟に敗れた輩が覚えるだろう「苛立ち」にちがいない。すなわち、相手に天罰が下るのを期待しながら、果たして、それを生きて目にできるのであるかと不安に駆られるといった・・・

ソロンの詩の第二部に述べられたテーマを独自に変奏する際に、テオグニスは、次のような本質問題をまるきり等閑に付していた。すなわち、神の手になる天地万有の統治が——ソロンも第一部に示したように——つねに正しいとするなら、善き人の努力があまりにしばしば実を結

ばず、逆に、悪しき人の犯す過ちがほとんど悪しき結果をもたらさないのはどうしてなのか・・・と。このような道徳的矛盾はしかし、テオグニスの関心をほとんど惹かなかつた。それどころか当人は、この問題をソロンのように「神の見地」からは考えず、ゆえに、人間ならではの希望や努力が渦巻く只中に、人間を超えた「埋め合わせの法則」が鎮座するのを目にすることもなかった。それでも一度なら、ソロンの問題提起に主観的に応じて「静かな個人的忍従（らしきもの）」を訴えないでもなかった。かれがみずからの人生体験から学んでいたのは、人間が、みずからの成功や失敗に何らの責任も負っていない点であった。だとするなら、神の意思にひたすら身を委ねる以外に道など残されていない。ひとは、みずからの運命にいささかも関与できないからである。他の箇所では、テオグニスはこうも語っている、富とか繁栄とか榮譽ですらその内に密かな「破滅の種」を宿し、われわれに必要なのは、それゆえ唯一つの事柄——「テュケー（幸運）」——を祈る以外にない、と。劣った人間なら、いくら金銭を手にしてもどれほどの役に立つだろうか。当人の心が「真つ直ぐ」でない以上、手にされた金銭もつまりは「破滅」しかもたらさない。

したがってテオグニスはこう考えた、富んできいようと貧しかろうと、本来の意味で貴人を貴人たらしめるもの、それがアレテーなのだ、と。要するにアレテーは「精神的な気高さ」という稀有の特質にほかならない。これに対して、人びとの中にはこう皮肉る者もなかったわけではない、そう口にする当の本人はそのような気高い道徳感情など持ち合わせていなかったではないか・・・と。そうではない。当人は、なるほどソロンの所式に則って説教したものの、それは、落剝した貴族階級に向けた尊敬の念に促されてのことであった。「あまねく徳は「正義」に集約され、しかも、正しい人間はすべからく「貴人」なのである」——まこと

に美しいこの格言を、テオグニスのものでないと否定する根拠などまるでない。そのような考えはおそらく、ポキユリデスのような平民から引き継がれたのだろうが、ともあれ、みずからの党派のモットーに用いられないでは済まなかった。大衆は、権力を求めての抗争でこれを自軍の攻撃の的に掲げ、次いで——テオグニスも目にしたように——大地に押し倒して蹂躪した。今やこの考えは、かつての支配階級の「鬨の声」となった。かれらは、今は不当に虐げられているものの、その昔「正義と法の何たるかを知っていた」唯一の存在であり、今なお——テオグニスの見るところ——真の正しさを手にする唯一の存在であったからである。このような見解に崇られて「正義」という至上の理想は、明らかにその範囲を狭められ、元々そうであった国家全体の徳から単なる一党派の徳に成り下がった。テオグニスはしかし、このような限定にさしたる不快も催さなかったにちがいない。ピンダロスもこう信じて疑わなかった、正義こそは貴族文化と切り離せない当の本質部分であって、実のところ、この文化の「華の中の華」と称されてよいのだ、と。そのような信じ込みを介して浮かび上がってくるのは、古い貴族理想が、ポリスの新しい精神にしっかりと組み込まれた点にちがいない。

ところで、そもその貴族階級がこうした新精神に完全に同化しようとするれば、何としても乗り越えなくては済まない「障壁」が一つばかりあった。さまざまの徳は「貴族の血」に由来する、というこの階級の揺るがざる信仰がそれに当たるだろうか。テオグニスはこう断言して憚らない、われわれの最高の義務は、みずからの「血の純潔」をしっかりと維持することなのだ、と。だからかれは、豊かな平民の娘とみずから結婚したり、あるいは、わが娘を成金の息子に嫁がせて傾いた家財のテコ入を画策する愚かで不実な貴族連中に、辛辣な攻撃を加えている。「われわれは通常、血統のよい牡羊やロバや馬を選んでこれらを育て上げる際

に、何はともあれ「よき血統」に重きを置くのだが、あるうことか貴族連中は、自分の卑しい女と結婚して恥とも思わない。まさに「富」が「種」を混乱させているのだ」——ここには、貴族の血筋とその訓練は「別格中の別格」なのだ、と声高に訴えられていて、ここから読み取れるのは、貴族階級の規定がかなり変容していた点にちがいない。この規定は、金銭や人数がもつ「水平化の力」に抗戦する中で、今やかなりの守勢に立たされていた。アテナイでは、国家全体が由々しい公共問題に直面して早々の解決を迫られていた手前、わけでも賢い人びと——その大半は貴族主義者であった——なら、単なる反動主義者に留まり続けることは許されなかった。ソロンにしても、単なる反動や敵対のレベルを超えて出た。とはいえ小規模な貴族階級が存在して、みずからの生存と固有の生活様式を保持しようと必死に戦っている場合、そうした階級はほとんど例外なく、テオグニスの教育的格言にわが姿を重ね合わせた。テオグニスの発想の多くはもつと後の段階で、すなわち、中産階級（ブルジョワジー）と無産階級（プロレタリアート）の抗争の中で再生したが、かれの教への価値は、つまりは貴族階級の存在と運命を共にした。この階級の地位が、みずからの血統に由来しようと、はたまたそれ以外の高い伝統に由来しようと……種族の維持は、同種繁殖と特別な訓練を介して為されなくてはならない——貴族階級に本質的ともいふべきこの発想は、わけてもスパルタにおいて実践され、さらには前四世紀の偉大な教育理論家たちを介しても実践された。そうした点はしかし、かれらの仕事を論じる際に詳しく吟味するとして、さしあたりはこう語るに留めよう、スパルタにおいても、さらにはプラトンやアリストテレスの理論においても、上に挙げた発想はともに特定の階級の壁を越えて広がり、ついには、ポリスこそ（同種繁殖と特別な訓練をおのずと促す以上）あまねく市民たちの教師である、というギリシアに普遍的な「発想」の

一翼を担うに至った、と。

ピンダロス…貴族社会の「声」の代弁者

さて、テオグニスからピンダロスに方向を転じるなら、メガラやその他の地域で貴族たちが社会的地位を守るために繰り広げた凄まじい戦いをあとにして、初期ギリシアの貴族階級が営んだ静かで、誇りに満ちた、汚れない生活の頂きに昇ることになる。この頂きに立ったなら、テオグニスの世界に渦巻いていた問題や闘争を忘れて、あの気高くて高遠な「理想」に漲っていた力と美を心安らかに驚嘆できるにちがいない。ピンダロスの示したのは、種族としての貴族階級がもつとも高貴な変容を遂げた時代に掲げていた理想にほかならない。この階級は、神話的過去から前五世紀——無情なまでに当世風な——におよぶ「栄光の世紀」を終えても、なおいまだオリンピア、ピュト、ネメア、コリントスのイストモスで催された四大大会での偉業を介して全ギリシアの耳目を集め、その勝利はあまねく地域の別、種族の別を超えて広く一般に称賛されていた。この階級がギリシアの性格の形成過程に果たした役割は、受け継いだ階級の特権や臆見を油断なく維持したり、土地財産に基づいて否応なく強化された道徳規定をしつかり磨き上げる、といった以上のものであったが、それをしかと眺めたいなら、どうしてもギリシアの貴族たちの先の局面をじっくり研究しないわけにはいかない。この局面こそ「人間性」という気高い理想を生み出した当のもので、生み出された理想は、アルカイック期や古典期のギリシア彫刻に——理解されるよりはしばしば称賛される形で——今日までその姿を留めている。これらの彫刻に写し取られた競技者は、力強さと気高さをこの上なく完全に調和させ、それがピンダロスの詩に再生して、はつらつと生き、感じ、われわれに

語りかけていた。かれは、ピンダロスの精神的活力と宗教的嚴肅を介して、われわれに、人間精神の手になるユニークで無比な作品にのみ具わった摩訶不思議な力を振るって止まないものである。それは、神に夢中になりつつも人間を忘れない「ギリシア」という世界が、この世的な力をはるかに超えた「完全性」にまで高められた人間の肉体と魂に、神の崇高さを目にした稀有の瞬間であった。あるいはこう言い換えてもよいだろうか、あの「神」というモデル——これを介して芸術家たちは「完全」という、到達できないが重要きわまりない法則を具体化してきた——を写し出そうとせつせと汗を流す人間の営みが、人間の形をしたこれらの神々（「競技者像」）にみずからの目標とその幸福を見出した、この上なく貴重な瞬間であった、と。

ピンダロスの詩は、なるほど「アルカイック（古風）」であったのだが、それはしかし、同時代の人びとの作品とは——さらには先人たちの作品とすら——異なつた意味においてそうであった。このような作品に比べると、ソロンのイアンボス調の詩は、用いられる言語の点でも情感の点でも完全に「モダン（当世風）」であるように見受けられる。ピンダロスの多様さ、豊富さ、論理的難解さは、あくまでも表面上のもので、きわめて根の深い「過去への想い」がまとう、いうならばモダンな衣装にすぎない。そのような衣装の下にそつと顔を覗かせていた「古代への愛」は、実のところ、生まれつきの強烈な渋味と、実生活での人付き合いの悪さにその源を発していた。イオニアの「より古い」文化を通り抜けてピンダロスに向かつていくのは、ホメロスの叙事詩からイオニアの個人的抒情詩やその自然哲学へと直接に連なる「発展の線」から身を離して、これらとは異質の世界に入っていくに等しい。ヘシオドスは、ホメロスやイオニア的発想の「忠実な弟子」であったけれども、その作品に目を通した読者なら、しばしば、叙事詩の基盤のはるか下方に葬り去ら

れたギリシア本土の「先史の闇」を突然に覗き見て、驚きの目を見張るにちがいない。けれども、これ以上に驚かされるのはピンダロスを紐解いた場合で、われわれは直ちに、ヘカタイオスやヘラクレイトスのイオニアには未知の世界に、すなわち、ホメロスやそこに登場する人物たち——かれらはイオニア思想の最初の灯りで照らされていた——より多くの点でいっそう古い世界に身を置くことになる。貴族階級の使命については、ホメロスにせよピンダロスにせよ多くの点で信念を共にしていたが、前者は、そうした使命をごく気軽に——ほとんど陽気に——扱っていたのに、若い詩人の方は、どう仕様もないほどクソ真面目にこれら口にしていった。そのような違いが導き出されたのは、いくぶんは、叙事詩とピンダロスの頌詩で狙いとするところが異なっていたからで、後者は、厳かな宗教的命を發していたのに、前者は、単に物語って飾り立てるのみであった。とはいえ、ピンダロスの途方もない厳しさは、ただ単に詩の様式や外的な狙いから導き出されたわけではなく、実のところ、当人の描写する貴族階級への深い親近感と強い尊敬の念にその源を仰いでいた。貴族的理想を声高に訴えるその舌に「ピンダロス特有の」と呼ばれてよい圧倒的な力が具わっていたのは、かれの本性が、生まれの点でも教育の点でも徹底して「貴族的」であったからにはかならない。

かれの作品の分量は、かつて、われわれが手にしているよりかなり多かった。ごく最近になって、エジプトでの幸運な発見のおかげで、それまでは完全に失われていた当人の宗教詩も世に知られ、その差がぐっと埋まったのは「慶賀」に耐えない。新たに発見された宗教詩は、勝利を褒め称える頌詩——のちには『エピニキア（勝利に寄せて）』と呼ばれた——よりはるかに数が多かったものの、双方に本質的な差はなかった。体育競技のもつ宗教的意味は、四大会の勝者を称えた当人のあまねく詩で具体的に語られていたし、貴族階級の宗教生活は、大会に注がれる無

類のエネルギーと野心の中でピークに達したからである。

ギリシア人の体育活動——言葉の最も広い意味での——は、歴史的に知られる最も初期の時代から、神々を称える祝祭にしっかりと結び付いていた。オリンピック競技も、おそらくは、オリンピックの地でペロプスを悼んで催された葬送競技——トロイの地でパトロクロスと悼んでそうされた、と『イリアス』に記されているような——に端を発していたにちがいない。そのような葬送競技は、知られているところでは、特定の折に定期的に催されていたらしい。たとえば、シキュオンの地でアドラストスのために繰り返された葬送競技など——異なった性格を具えていたとはいえ——そうした具体例ではないだろうか。古い伝統を背負ったこの種の競技は、オリンピックのゼウス大神に捧げる大会に容易に吸収されていったにちがいない。そして、より古いオリンピック聖域の礎石の下から発掘された奉納馬の彫像は、明らかに、この地のかつての祭礼場で——コロエブスが徒歩競争に勝ちを収めた伝統的日付よりはるか前に——二輪戦車競走が行われていたのを物語っていた。ギリシア史の初期の数世紀にわたって定期的に催された全ギリシア規模の他の三つの大会は、すべからずオリンピックを手本として発展し、ピンダロスの時代までに——オリンピックほど重視されなかったとはいえ——御本家と肩を並べるまでになった。単純素朴な徒歩競争から、ピンダロスの頌詩に映し出された多種多様なプログラムにいたるさまざまな競技の顛末は、のちの年代記学者たちの手で正確な時間区分を施されて整理されたが、そのような競技の証的価値は、まだ論争中で定まっていない。

ここではしかし、そのような競技が辿った歴史的局面も、また、どのような競技が行われたかという種目的局面もともに気に掛けるには及ばない。当然ながら「競い合い」に主眼を置いた競技は、元々は貴族階級の訓練に用いられ、その点は詩からも確かめられたのだが、これこそ、

ピンダロスの競技観の基本前提にはかならない。かれの時代の体育競技は、かなり前から貴族の独占分野でなくなっていたが、それでもやはり、この分野の指導的役割は「古い家系」に握られていた。かれらには、長きにわたる訓練に身を委ねるに足る富と時間が十二分に具わっていたからである。加えてかれらの間には、体育的武勇を高く評価する伝統も生き残っていたし、体育に励むにふさわしい性格上・体格上の特性もわけでも容易に引き継がれていた。同じような特性と伝統は、時として中産階級のメンバーにも培われ、かれらもさまざまな競技に勝ちを収めたのではあったが……。『貴族の世紀』にみられた揺るぎない活力と朽ちない伝統が、世の専門主義（プロフェッショナルリズム）に白旗を掲げざるを得なくなったのは、ピンダロスの時代が終わったことであつた。そして、この時期に限つてのみ、粗野で反知性的な「肉体の強さ」を過大評価する世の風潮に激しい攻撃を加えたクセノパネスの辛辣さも——いささか遅きに失したとはいえ——長きに及んで世論の共鳴を呼び起こすことができた。精神はどうやら肉体とは別物で、時としてこれに敵対もする——ギリシア人がこう実感しはじめると、旧来の体育的理想は救いの余地もないほど価値を下げ、すぐさま、ギリシア生活に占める重要性も失うにいたつた。もつとも競技自体は、単なるスポーツとしてならその後の数世紀に及んでしぶとく生き残つたけれども……。そもそもその後の競技にとつて、純肉体的な強さとか有能さといった純知的な（＝リアルな現実を掛け離れた）観念ほど相容れないものはない。われわれは、ギリシア彫刻の傑作に肉体的なものと精神的なものがこの上なく一体化している様を目にして——それが、われわれには回復不能なまでに失われているもの——なおも称賛を禁じ得ないのだが、ここには「男性的武勇」という体育理想を——たとえ現実から程遠いとはいえ——どのよう

ないだろうか。クセノパネスの眩いた苦情がどの程度まで正当であつたか、を決めるのは難事としても、偉大なギリシアの彫刻家たちの作品を眺めたなら、次の点はほぼ明らかにちがいない。すなわち、神々にふさわしい姿の中に当時の宗教芸術がせつせと具体化に励んだ「気高い理想」を解釈する人物として、残念ながら、クセノパネスの「力量不足」は覆いようもない……。と。

ピンダロスの頌詩は、競技者の人生における最高の瞬間、つまりは、大々的な競技大会の一つに出場して得た「見事な勝利」を褒め称えるために書かれていた。勝利こそは詩作の必須条件であつた。勝利はふつう、勝者の凱旋の折に——あるいはその直後に——若い同胞市民から成るクロスで盛大に歌われたからである。ピンダロスでは、勝利を称える頌詩とそれが歌われる外的状況は緊密に繋がりが合っていたが、そこには、神々を称えた頌詩における崇拜と芸術の繋がりに似た宗教的意味が認められた。この繋がりはしかし、誰の目にも明らかというわけではない。叙事詩は、元々は宗教芸術の部類に属さず、これに続いてイオニアの地に登場したのも個人色の濃い抒情詩で、そこには、詩人みずからの考えたこと・感じたことが直接に表明されていた。このような展開の流れでは、神々を称える頌詩といえども、記憶の彼方の昔から叙事詩に比べられる——あるいは等位される——宗教様式の詩であつたにせよ、いつそう自由な精神に浸透されるほかはなかつた。結果として頌詩のもつ古いお定まりの様式は、多くの「変奏」を受け入れた。すなわち詩人は、みずからの宗教的発想を頌詩に注ぎ入れ、頌詩自体をみずからの個性を表明する道具にするか、あるいはイオニアやアイオリアの抒情詩人のように、頌詩や祈りを単なる通路として用い、そつと耳を傾ける神々に人間精神の最も奥深い情念を伝えたのだつた。前六世紀の終わりには、さらなる進展が目にした。この時期に、ギリシア本土ですら「個性への

関心がいや増したからである。頌詩の様式は、神々に仕えるから、人びとを称えるに乗り換えられ、結果として、あるうことか人間存在が頌詩の主題を占めるに至った。このような説明は、むしろ半神的威厳を具えた人びと——たとえばオリンピック競技の勝者のような——を対象としていたが、頌詩における世俗的風潮の高まりは、新たな出発を物語っていた。たとえばピンダロスの偉大な同時代人で、みずからの「ミューズを金銭で売る」人物として有名なケオス島のイウリスのシモニデスという職業詩人——勝利を称える頌詩とその他の多くの宗教色の薄い折々の詩に優れていた——とか、いっそう重要度の低い甥で競争相手のバキリデス等々にみられる「世俗性」は疑いの余地がないからである。

ピンダロスは、勝利を称える従来の頌詩を、一種の宗教詩にまで仕上げた最初の人物であった。体育競技という古い貴族的觀念から靈感を得て、かれは、勝つことでみずからの雄々しさを全うしようと争い合う人びとの情景を、道徳的にも宗教的にも大いに意味あるものにした。そうすることで当人は、新たなタイプの抒情詩を生み出したが、その詩は、情動と体験のはるかな深みから立ち現れて、陽の照りつける勝ち誇った頂きから人間の運命に織り込まれたあまたの神秘と闘争をじつと見下ろしているように思われた。かれの詩は、辛辣で、難解で、徹底して宗教的であったが、比べようもなく闊達に生命と活動を謳歌していた。人間の勝者を称えた頌詩が可能になるのは、ピンダロスの考えたところ、このような宗教の様式に訴える以外にありえなかつた。頌詩の様式をこのように改変して、かれは、これを生み出した得意満面の人びとから当の詩を引き継ぎつつ、完全にわがものとした。そのような行為を正当化していたのは、頌詩で扱われる気高い主題の本当の意味を把握しているのは、わたしを措いてない、という雄々しい自負にちがいない。かれは、

勝利を称える頌詩を用いて古い貴族的規定に——これがほとんど共感もなく白い目で眺められていた時代にさえ——新たな権威を付与することができた。それと同時に新たな抒情詩は、真の貴族的信念に励まされつつ、今やみずからの「リアルな本性」にたどり着いたのだった。競技者の勝利を称える際には、どうしても競技者本人のお蔭を蒙らないわけにはいかない——このような実感は、かれには無縁だった。もしも「お蔭を蒙った」なら、それは、詩という芸術の名誉を著しく汚したにちがいない。かれはさらに、いわゆる「職人芸」を演じることもなく、それゆえ、みずからの主題の要望に叶うような創作は試みなかつた。かれには「おもねり」がなく、常に、みずからが称える当の勝者——王であれ、貴族であれ、はたまた単なる市民であれ——と同じ地平に立っていささかも動じなかつた。歌う側の詩人と歌われる側の勝者は相互に不可分である、とかれの目には映った。そのような関係図式は、かれ独自のもので当時のギリシア人には見慣れなかつたが、これ自体は、栄えある偉業を広く世に伝える、という昔からの吟遊詩人の元々の役割の再生にほかならない。

およそこのように、かれは、詩にとって最も初期の靈感の本体ともいふべき英雄精神を、ほかでもない詩にしっかりと賦活させた。詩は、かれの手で出来事の単なる記録以上のものに、あるいは、個人的情感を飾り立てて単に表出した以上のものになった。かれは、詩自体を今一度作り変えて、後代の人びとに手本と仰がれる「武勇」を称えるものにまで仕上げたからである。かれの詩はそれぞれ、純粹に外的な——明らかに折々の——状況に強く規定されていたが、この事実は、当人の最大の強味でもあつた。勝利であるなら常に歌われるのを要求しないはずはなかつたからである。かれの詩の基盤を成していたのは、永遠の基準に向けたこのような凝視を措いてない。かれは、「ドーリアの豎琴を止め釘か

「外して」その弦を指で叩く（「作詩する」際には、例外なく、何度も異なった言い回しを用いてここでの考えをくり返した。曰く、「いかなる事もそれとは別の事を渴望するものだが、勝利は、歌われるのを最大に愛してこれ以外を求めない。歌こそ、王冠と徳のわけても手早い仲間なのだから」と。さらにはこうも宣言した、気高い人びとを称えるのは「正義の華（「まっとうの極）」なのだ、と。実にかれは、しばしば「歌」を称して、詩人から勝者への「まっとうな付託」にちがいない、と語っていた。勝利に得意満面の「アレタ」——ピンダロス当人の厳しいドーリア様式で「アレテー」を書くところなる——は、「押し黙って大地に隠されている」のを潔しとせず、詩人の作品に歌われて「永遠」になるのをひたすら求めたからである。ピンダロスの魔術的な筆致を介して、単調で月並みなこの世の事柄はすべからず、ただちに創造の朝の新鮮な活力を取り戻した。ティマサルコスというアイギナ島の少年に捧げた歌で、かれはこう語っている、「口にされる言葉は、なされる行為より長い生命をもつ。優美の女神の与えたまう成功で、舌が、心の深みからそれを引き出す場合には」と。

ピンダロスに先立って書かれたコロスの抒情詩については、かれの作品を抒情詩の発展過程にしっかりと位置付けるに足る十分な「数」がまだ手にされていないが、それでもほぼ間違いないと思われるのは、当人が、抒情詩という「属」を何か新しいものに変容させた点と、その詩が、コロスの伝統から直接には「導き出され」ない点であるだろう。以前のコロスの詩人たちは、叙事詩を抒情詩化するにあたり、叙事詩の素材を用いつつこれらを抒情詩の形に組み直したけれども、これは、ピンダロスのやり方に真つ向から——当人の言語は多くの点で先人たちに負っていたもの——敵対した。あるいは、こう語った方がいっそう事実に近いかもしれない、叙事詩における靈感の本体ともいべき英雄

精神とヒロイズムの礼賛は、かれの作品を介して「抒情詩」という形で再生したのだ、と。ピンダロスは、みずからの詩を宗教的・社会的な理想に従わせて、古代の騎士道を何とか最後まで生き残らせようと徹底した——ほとんど修行僧まがいの——自己献身の汗を流したが、ここにみる姿勢ほど、アルキロコスからサッポーにいたるイオニアとアイオリアの詩に顕著な「個人感情の自由な表出」の対極に置かれるものは無かつたにちがいない。

ピンダロスは、みずからの詩の本性とその目的をどのように考えていたか——この点が理解されたなら、詩の様式もいっそう理解されるにちがいない。頌詩にコメントする世の学者たちは、詩の「様式」という問題にひたすら注意を振り向けてきた。アウグスト・ベックは、詩人を解釈するには当人の歴史的状况を全体的に理解し、かつ精神的共感と直観に訴えなくてはならない、と唱えて、みずからの偉大な作品でこれを実践した最初の人物であった。かれは、繋がりを欠いたピンダロスの思想から「隠された一体性」を抽出しようと多大の汗を流したが、その際にしばしば念頭を掠めたのは、当の詩には構造など無いのではないか……という想いであつた。だから、ヴィラモヴィッツや同時代の学者たちがベックの採った方法を捨て、頌詩の底に横たわるといふ問題の多い「一体性」よりはむしろ、多方面にわたる頌詩の「変奏」自体をじっくり味わう方向を選んだとき、この対応はまことに好意的に受け入れられた。かれらの採った方法は、説明もされずに放置された細目の数々への理解をおのずと押し進めたが、それでもやはり、芸術作品を「まるごと」の形で把握しようとするのは、どう見ても無理な話というほかはない。ピンダロスの場合は、その芸術が当人の追求する理想とあまりに直接に結び付いているだけに、その詩には果たして——文体上のまとまりと同じく——構造上のまとまりも具わっていたのかどうか、を決定するのは

二重の意味で重要であった。かれの詩は、なるほどきつちりした型など具えていないが、その事実が確認されたにせよ、いっそう高次の関心を惹く問題がやはり残されている。ピンダロスの詩は、詩人の想像的天分ともいふべき、自由な衝動に身を委ねていた——ロマン時代の批評家たちは、みずからの前提に励まされてこのように信じ込んだが、今日の人間なら、誰一人としてそうは信じないにちがいない。なるほど、ピンダロスの詩の構造を先のように扱う姿勢そのものは今日でも無意識裡に存在したが、その場合、いわゆる「職人的熟練」が正当に扱われているとは言いがたい。そのような熟練はしかし、ギリシアの芸術では「独創性」に劣らず重要な位置を占めていた——現代の人びとは、こうきつちりと学び取っている。

勝利と歌の分かちがたい結びつきの「具体例」から出発すると、ピンダロスの詩的想像力が、その主題を「自家薬籠中のもの」とする道筋にいくつかのものがある点に気付かれるのではないだろうか。かれの想像力は、たとえば拳闘試合や二輪戦車競走の事実的細目を——あのソポクレスが『エレクトラ』で、デルポイにおける二輪戦車競走の模様を伝令の口から活き活きと語らせて再現したように——熱狂する観客たち、舞い上がる土埃、きしむ車輪等々を再現しつつありありと描き出したが、当の本人は、競技大会のこうした局面にほとんど注意を払っていないかったように見受けられる。それを描くにあたっても、お定まりの仄めかす言い回しに訴えるのみで、あえて強調もしなかつたからである。いっその関心が振り向けられたのは、競技の事実的景観よりはむしろ、これの精神面での克服課題であった。その眼差しはひたすら勝者に注がれていた。かれはこう信じて疑わない、最高度の人間的アレテーを証拠づけるのが「勝利」なのだ、と。かれの詩の様式を規定していたのはこうした信仰にほかならず、この信仰を理解できないなら、当の様式など把握

できようはずもない。ギリシアの芸術家は、仕事に際して選り取られた伝統の様式にきつく縛り付けられていたが、最終には、みずからの魂が最も信じるところに従ってその様式を選び取り、これを展開したからである。

ピンダロス当人は、詩人としての使命をどう考えていたのか——この点は、かれを理解する最上の導きとなるにちがいない。かれは、みずからを芸術家タイプの彫刻家たちに匹敵する存在と考え、しばしば、かれらの作品からさまざまな比喻を引き出し出していた。たとえば、デルポイの神域にはギリシアの各都市の建造した豪華な宝物庫が林立していたが、これらを思い浮かべながら当人は、みずからの詩を頌詩の「テサウロス（宝庫）」の形でイメージしているし、大げさな序文では、みずからの頌詩をしばしば柱に支えられた宮殿正面の形で思い描いているからである。しかも第五ネメア頌では、みずからと勝者の関係を彫刻家とその主題の關係に準えてこう口にして、「わたしは、台座の上じつと突っ立って動かない「彫像」をこしらえ上げる彫刻家ではない」と。とはいえ対比には、おのずと「比較」が含まれて、これに続く章句では、みずからの作品が彫刻家のそれを凌駕している、という当人の実感がしつかりと映し出されていた。「しかるにわたしが口にする甘い歌は、ランポンの誇りとする息子、あの力に溢れたピュテアスがネメア祭の五種競技で見事に王冠を勝ち取った、と述べ伝えながら、あまねく大船や小舟に運ばれて、アエギナから広く各地に行き渡るのだ……」と。比較が為されてきているのは明らかだった。ピンダロスの時代、彫刻家たちの手で巧みに刻まれたのは神々の似姿とか競技に勝った勇者たちの像であったが、それらはすべて現実の動きを欠いていたからである。とはいえ、こうした相違点より類似点の方がいっそう意味も深いのではないだろうか。この時代の彫像は、みずからの写す勝者に対してピンダロスの詩と同等の

姿勢を保っていたからである。すなわち彫像に刻まれているのは、勝者の個人的特徴でなく、競技大会に向けて鍛え上げられた理想的な男性の肉体なのである。ピンダロスは、これ以上の確な比較対象を見い出すことができなかった。かれもまた、称える勝者を記述するにあたり、あくまでも個人としてでなく最高のアレテー——ピンダロスの表現を借りるなら「アレタ」——を代表する典型としてそうしたからである。彫刻家と詩人の姿勢を直接に規定していたのは、オリンピック競技の勝利がもつ性格と、その底に横たわるギリシア特有の人間本性観にほかならない。このような比較は——ピンダロスから借用されたか否かは定かでないもの——今一度その顔を覗かせた。というのもプラトンは『国家』において、哲人王の具えるべきアレテーを理想の形で記述した際に、ソクラテスを彫刻家に比べていたからである。しかも同じ作品の別の箇所では、形相（「イデア」）こそは理想を生み出す原理である、と——その具体例には重きを置かず——記述して、そのような理想を創り出す哲学の力を、生身の人間でなく人間美の理想をこそ描く画家の技法に比べてもいた。およそこのように、芸術——わけでも神々や英雄的勝者の像を造り上げる彫刻——の原理と、ピンダロスの詩に——もつと後にはプラトンの哲学にも——みられる「人間性」という最高理想を喚起する働きには、きわめて深い血縁関係が認められたが、それは、ギリシア人も十分に自覚するところであった。一方における視覚芸術と他方における詩や哲学は、ともに、同じ目標に向けて汗を流し合っていた。ピンダロスは、現実の彫刻家よりずっと高次の「彫刻の徒」ではなかったか。かれの手を介して勝者たちは、アレタ（「アレテー」）の「真の手本」にまで磨き上げられたからである。

ピンダロスは、文字通りに「徹底して」みずからの使命に邁進したが、これを十二分に理解したいなら、どうしても同時代の人びとやそのライ

バルたち、わけでもシモニデスやバキリデスと比較してみないわけにはいかない。これらの詩人たちは、ともに男性的武勇を称えたが、それは、このような武勇礼賛が勝利を称える頌詩の伝統的役割であったからにはかならない。しかもシモニデスの作品には、次の点を証拠づける個人的発言がたつぷりと詰め込まれていた。すなわち、総じてアレテーとは何なのかの問い——勝者のアレテーが何なのかの問いはさておいて——は、早くも前五世紀の人びとの中心問題となりはじめていた、という……。かれは、しみじみと嘆息しながら、このようなアレテーにはほとんどお目にかからないと漏らしている。そしてこう口にするのである、アレテーは、険しい峰の頂きに足速のニンフたちの聖歌隊に囲まれながら、たった独りで暮らしている。死すべき人間がその姿を目にしようとすれば、魂を振るような辛い汗をみずからの中枢器官から絞らなくてはならない、と。「アンドレイア」という単語にはこうした章句中ではじめてお目にかかるが、その意味は、いまだ「勇氣」に特殊化される前の端的な「雄々しさ」なのである。この点を説明しているものに、シモニデスが、テッサリア人のスコパスに語りかけた有名なスコリオン（祝宴歌）がある。そこでは、心と肉体の双方を含んだ原初のアレテー観が開示されていたからである。曰く、「手においても足においても心においても、すべからず堅実で申し分のないような、本当の意味でのアレテーを具えた男となるのは、まことに困難というほかはない」と。アレテーの下地を成している慎重で、厳しく、それでいて気高い「所式」は、こうした言葉を介してシモニデスと時代を同じくする人びとに明かされた。かれらには、この所式に向けた新感覚をわけでも身に付けてもらいたかったからである。ここでシモニデスから提出されている問題を理解したいなら、以上を把握するのが何よりの得策にちがいない。かれはこう口にしてい

そのおかげでほとんど完成に至れない。完全なのは神々のみで、人間は、破滅の運命に触れられたなら、とうてい完全になど成りえない。神々に愛されるか、はたまた、神々の手で幸運を授けられた人士を別にするなら、人間の身でアレテーに至った者など居ないのだ、と。それゆえシモニデスは、自分の方から下劣な事柄に手を染めない人間をしつかりと称えた。「けれども、大地に育てられたわれわれの間に、もしも潔白な人間を目にできたなら、そうした本人を君に示してやるとしよう」と。

シモニデスの証言がこの上なく重要であるのは、そこに——まことに興味深いことに——次のような点が明かされていたからである。すなわち人間は、どれほど足掻こうとも、全面的に——あるいは部分的に——運命の手から逃れられない、というアルキロコス以後のイオニア抒情詩で展開され、いつその複雑さと重要さを加えていった発想が、どうしたプロセスをへて古い貴族的な道德規定に入り込んでいったか、という……。というのもシモニデスは、ピンダロスと同じく勝利を称えるみずからの頌詩で、古い伝統の代弁を強いられていたからである。当人をわけても興味深い人物にしているのは、いくつかの大きく異なった伝統の流れがその作品で合流しているからにはかならない。かれは、譬えてみれば、イオニア式、アイオリア式、ドーリア式といった三つの生活様式の直接の路線上に突っ立っていた。すなわち、前六世紀の終わり近くに興った全ギリシア型の新文化を代表する典型であつて、アレテーというギリシア式觀念がどのように展開するかを目標としたこの上なく貴重な人物なのである。ソクラテスは、シモニデスの祝宴歌の正しい解釈をめぐるプラトンの『プロタゴラス』でソフィストたちと激しく論争したが、それは、以上のような理由に因るといってよい。けれども、まさしくこの理由からシモニデスは、ピンダロスと違って、貴族的な道德理想を十全に代表する人物とはみなしがたい。かれは、なるほどピン

ダロスやアイスキュロスの時代のアレテー観を歴史的に探る上で省いてならない人物ではあつたが、だからといってアレテーが、当人にとって知的な論議をくり広げる格好のテーマ以上のものであつた、とはとうてい口にできないのである。かれは、最初のソフィストと呼ばれてしかるべきだからである。しかるにアレテーは、ピンダロスにとってあまねく信念の根であるばかりか、その詩を導く構造原理でもあつた。かれの場合、しかじかの思想を受け容れるか、はたまた排除するかは、その思想が、アレテーの体的代表として、勝者を称える、という偉大な仕事にどう関係するか——プラスに作用するか、はたまたマイナスに作用するか——に大きく左右された。当人の作品の様式を理解したければそこに体现された道德基準に問いかけるほかはない、という事實は、いかなるギリシアの詩人にも勝つてピンダロスにこそ当てはまつた。そうした点の正しさは、この本（『バイディア』）の扱う範囲が、芸術作品の様式を、まさに様式そのものとして解析するのを許してくれない以上、事細かに示すことはできないが、もしもピンダロスの貴族理想の研究が今後止まないなら、かれの詩の創作原理についていつそう多くが学び取られるのではないだろうか。

ピンダロスは、アレテーを貴族階級の特性と考へていた以上、それが、過去の英雄たちの偉業でたつぷり装丁されている、とも信じていた。かれは常々、勝者を、当人の家系の栄えある伝統を受け継いだ、価値ある相続人とみなして、当人とその栄光のいくばくかを伝え残した偉大な祖先たちを大々的に称へたが、だからといって目下の勝者の業績を低く見積もっているわけではない。アレタ（『アレテー』）が、神聖とされるのは、これを具えた家系の最初の祖先が、神——ないしは半神——だったからで、その力は、神なる祖先から引き継がれ、各々の後続世代の中で絶えず更新された。ゆえにピンダロスは、世の勝者を純然たる

個人だなどと考えない。手にした勝利は、当人の「聖なる血」を介して得られたからである。結果として、英雄的人物の偉業に対する称賛はほぼすべて、当人の血統に対する称賛に移っていった。勝者の祖先に向けた称賛は、勝利を称えるかれの頌詩のお定まりといえよう。これを介して勝者は、神々や英雄たちの「聖なる仲間」に参入できたからである。第二オリンピア頌は、次のセリフで幕を開けている、「広く言い触らしてよいのは、どの神、どの英雄、どの人間であろうか……」。そして、オリンピアに祀られている大神ゼウスや数々の競技大会を開設した英雄ヘラクレスに並んで、この頌が「かれの都市の擁護者で栄えある列の華」に据えるのは、アクラガスの支配者で四輪戦車競走に勝ちを収めたテロンであった。いうまでもなく、勝者の家系が「善行と幸運に満たされてきたわけではない。ピンドロスの宗教感情がどれほどに深く、その精神がいかに自由であったかは、かれが、高い徳に降りかかる「神からの不幸」という暗部に言及する際にわけても目にされるにちがいない。生きて行為する者なら苦しめないわけにはいかない——これこそ、ピンドロスの信じる場所であり、ひいてはギリシアの信じる場所なのである。ここにいう「行為」は、偉人のそれに限定されなくてはならない。「為すことで苦しむ」と掛け値なしに言われてよいのは「偉人」のみだからである。ピンドロスはこう口にして、このように「時」は、生来の徳の「褒美」としてテロンの家族やその父親に富と名誉をもたらしたが、他方また罪と不幸にも巻き込んだ。そして「時」ですら為された事柄を元には戻せないが、忘却なら、好意の霊の手で与えられないこともない。神の定めた運命が豊かな幸運を高々と抱え上げるとき、悪意に満ちた不幸も、その気高い喜びに打ち負かされるほかはないのだから」と。

ある家系の幸運ばかりでなく、そのアレテーもやはり神々に源を發していた。それゆえ、ピンドロスに解決を迫った難問はこうであった、あ

またの著名人を長きにわたって輩出したのち「家系のアレテー」は時としてピタリと途絶えたが、このような事態はどうして生じるのだろうか。ここにみる「アレテーの停止」は、その家系の神のごとき武勇を明かして今の現在を英雄的過去に結びつける「証拠の連鎖」が、訳の分からない中断を引き起こした事態のように見受けられる。ピンドロスの生きた新時代は、アレテーがもはや血や種族に結びついているとは信じ込まず、しかじかの名家の代表者たちが暴露するさまさまの「不適合ぶり」を十二分に目にしてきたにちがいない。ピンドロスは、人間のアレテーがどれほどに移ろい易いか、を第六ネメア頌でくわしく説いている。人間の種族と神々の種族は、ともに「大地」という共通の母から生命の息をもらいながら同等というわけではなく、前者の力は、後者のそれと大きく隔たっていた。人間という種族は「無」でしかないのに、神々の住まう天はとこしえに揺らがぬ。とはいえ人間は、みずからの運命の不確かさにもかかわらず、心の力において、あるいは生まれにおいて不死なる神々に似ていないわけでもない。だからアルキミダスは、少年向けのレスリング大会に勝利してわが家系の「神のごとき強さ」を明かしたのだった。そうした強さは、かれの父親から消え去ったかに見えたが、父親の父親ブラクシダマスの段階ではしっかり目にされていた。当人は、オリンピア、イストモス、ネメアの各大会で見事な勝利を手にしたからである。そしてアルキミダスは、手にしたあまたの勝利によって父親のソクレイデス——栄えある父の不肖の子——の「不名誉な無名性」に終止符を打った。およそこのように、そもその強さは変化する「場」に即して、あるいは一年に及んで活動し、あるいは活動を止めて憩うのだった。貴族体制そのものは、たぐいまれな偉人たちが途絶えることなく出現したから維持できた、といえるだろうか。家系の一世代に——あるいは数世代にわたって——このような収穫物を欠くという不祥事は、

ギリシアの心性には何とも理解しがたい出来事であった。そのような出来事が再び目にされるのは、のちのキリスト教期ではないだろうか。というのも、この時代を生きた『崇高さについて』の著者は、退廃の時代における創造的天分の途絶えをしみじみと論じていたからである。

かくしてピンダロスは、称える勝者たちの祖先——ギリシア本土では、家系の祖先たちは単に追憶の中に生きたばかりでなく、実際に栄えある墓の中に生きていた——をたえず思い浮かべながら見事な哲学を形造つて、豊かで、輝かしく、高貴な家系の異なった世代にみられる美点、幸福、ひいてはその不幸を徹底して考察した。ギリシアにおける名門の歴史は、偉大な伝統の興亡を物語る具体的事例をたつぷり提示してくれるにちがいない。ピンダロスもむろん、そうした伝統に深い関心を抱いたが、その関心はもっぱら、偉大な具体例に具わる「教育力」に焦点づけられていた。過去を称えずと以前に斃れた栄えある英雄たちを崇めること——はるかホメロス以来、これは貴族教育の根本基盤の一つであった。アレテーへの称賛が、原則的に詩人の仕事であったとすれば、ほかでもない詩人こそ最高の意味での「教育者」と呼べるのではないだろうか。ピンダロスは、みずからの義務とその力を宗教次元で深く理解したから、このような使命をあえて引き受けた。そうした点でかれは、没個人的にホメロスを語る吟遊詩人たちと大きく異なっていた。かれの扱う英雄たちは、今のこの世界に生きて奮闘する人びとを措いてなかったが、かれらは、かれの手で神話の世界に移し入れられた。すなわち「英雄たちの理想世界」に移し入れられたのだが、そこでの英雄たちこそ、みずからのヒロイズムを介して後代の人びとの「手本」となっていた人士にほかならない。この世界に招き入れられると、かれらは、その力を振るうことになって、あくまでも業績の上で英雄たちと同じ高みに達することができた。ピンダロスにみられる神話の使用は、そうした狙いに支えられて固有の価値を手に入れた。かれはこう考えた、中傷や誹謗等々の行為——偉大なアルキロコスのみずからの詩でこれを実行した——は「下劣」以外の何ものでもない、と。ピンダロスを中傷する輩は、シユラクサの王ヒエロンにこう耳打ちしたと伝えられている、あの男はあるうことか貴方を貶していましたよ、と。当のピンダロスは、第二ピユティア頌の献呈文において、王にどれほど感謝の念を抱いているかを強く意識しながらこの告発を駁している。かれは、ヒエロンを賛美しながらも、模倣されるべき「手本」はしっかりと提示した。かれの見るところ、王は、スキヤンダルめいた噂話に耳を傾けることでみずからを貶めていたからである。王たるもの、本来そうある以上に高まるう、などと熱望しなくてもよいが、少なくとも詩人には許すべきである、わたしには「真の自己」を提示してもよいのだぞ、と。王ならば、それより下に沈んではならないからである。このような箇所、理想的手本を駆使するピンダロスの手腕はわけても冴え渡っている。「あなたがそうで在るところのものに成れ」という一文は、かれの教育メッセージの全体を的確に要約しているように思われる。それはまた、広く人類に掲げられるべき伝統的手本がすべからず意図するところでもあった。いやしくも人間なら、みずからの中に「真の自己」——いつそう高い地平にまで上り詰めた——を見つめるべきなのである。ここで改めて目にされるのは、ここにいう貴族的教養の理想とプラトンのイデア哲学における教育精神が、社会的にも精神的にも深く似通っている点にちがいない。プラトンの哲学は貴族の教育体系を基盤とし、イオニアのあまねく自然哲学とは——世の哲学史家がほとんど常に双方を結びつけるにもかかわらず——基本的にその質を異にしていた。それなのに、プラトンの標準型の校定本の紹介にこのピンダロスに一言も触られていないのは、ま

ことに奇妙というほかはない。しかるに、いわゆる物活論者の第一要素——空気、火、水等々——は、風土病さながらの執拗さで後続の校定本のすべてに繰り返してその顔を覗かせているのである。

ピンダロスからヒエロン王に捧げられる賛美は、その逆の批判と同じく、ひたすらに「正直」を旨としなくてはならない。ならばこそ受け手を励まして、いつそその汗も流させたからである。この点を納得したいなら、あまねくピンダロスの作品から教育的称賛の最も簡単な具体例

——第六ピュティア頌——を取り上げるだけで十分に事は足りるのではないだろうか。この頌が語りかける相手はトラシユビュロスという若者で、当人は、クセノクラテスの息子でアクラガスの僭主テロンの甥でもあった。かれはデルポイを訪れて、競技大会で父親の二輪戦車を駆り、堂々と試合を制していた。ピンダロスは、そうした勝利を短い頌で称えて当人の親孝行ぶりを絶賛した。親孝行こそ、貴族の古い規定によると、至高の大神ゼウスへの「崇敬」に次いだ義務とみなされていたからである。英雄たちの模範的教师であったケンタウロスの賢者キロンが、保護下に置かれていた幼いアキレウスの心に刻み込んだのもこれであった。そして、威厳に溢れたこの名（「トラシユビュロス」）に次いで詩人の口から囁かれたのは、ネストルの息子アンティロコスであった。かれは、トロイ戦争で年老いた父親に代わり、エチオピア人たちを率いたメモノンと闘いその生命を捨てたからである。「とはいえ、父親の「おめがね」にわけても叶った人物・・・といえ、今日の人びとの中でトラシユビュロスにまさる者はいない」。アンティロコスという伝統的な手本は、ここでは、称賛すべき親孝行の実例に組み込まれ、その行為も簡単な賛美に留められていたが、ともあれ詩人はこのように、英雄的な手本に溢れた巨大な「宝庫」から偉大な実例を取り出しては、あまねくアレテーの具体例を照らし出して褒め称えた。そうしながら、伝統の力をたえず当今

の実例に輸血して、その理想化と改造にひたすら汗を流したのだった。かれが生きて活動したのは、いうところの「神話」が現実よりもいっそうリアルな世界であった。かれは、称える相手がたとえ古い貴族であろうと、はたまた成り上がりの僭主や父を欠いた中産階級であろうと、すべからず半神的な栄光と同じ高みにまで引き上げた。かれらの人生とその闘争が持ついっそう高次の意味を鋭く洞察した、より深い「知識」に基づいた魔術的な筆致に訴えながら・・・

ピンダロスが、若い英雄たちを教育するケンタウロスの賢者キロンにみたのは、みずからの教育的使命への「神話の手本」にほかならない。そのような手本には、別の箇所——たとえば第三ネメア頌——でもお目にかかれるのではないだろうか。そこには、あまたの教育的実例がたつぷりと溢れていたからである。この頌において偉大な武勇の手本として召喚されているのは、アエギナ祭の勝者アリストクレイデスの祖先たち——ペレウス、テラモン、アキレウスの三者——であった。詩人の心は、アキレウス当人からかれの育ったキロンの洞窟に向けられるが、アレテーの在処は貴族の家系の血の中だ、と信じられているのであれば、そのようなアレテーが教育できる、などと信じてよいのだろうか。この問いは、再三にわたってピンダロスの口から繰り返されているが、基本的には、早くもホメロスで持ち出されていた。『イリアス』の第九巻に次のような光景が目にしたからである。アキレウスは、ギリシア軍の危機に際して師のポイニクスと向き合ったが、諄々とした師の説諭も頑なな弟子の心にまるで功を奏さなかった・・・。そうはいっても、生まれつきの性格がそもそも「助言」など聞き入れるのかどうか。ピンダロスが関心を寄せるのは、人間の本当の徳が「後天的」に学ばれるのか、それとも、血を介して単に「先天的」に引き継がれるにすぎないのか、という今日の問題にほかならない。同じ問題はプラトンでも再三にわ

たつて登場していたが、ピンダロスは、これを公式化した最初の人物といえるだろう。当の問題は、貴族の教育的伝統と新たな合理精神が激しくせめぎ合う中でかれに押し付けられたからである。その作品を介して明らかなのは、本人が、この問題をめぐって長きにわたる思索を巡らしていた点にちがいない。第三ネメア頌では、これに答えて次のように語られている、「人並み外れて強大であるのは、生まれついで恵み（＝天分）というほかはない。それに比べると、教えられて学ぶような輩は、黄昏の存在」に近く、精神において迷い、確かな足取りで前に進みもせず、あまたの徳に不完全な精神で軽く触れるに留まっている」と。アキレウスは、教えられるに先立って持ち前のヒロイズムを堂々と披露してキロンを驚かせた——このように英雄譚は伝えていくが、ピンダロスによると、それは誰も知るところであつたらしい。この英雄譚は、あの問いに正面から答えていた。すなわち教育は、それを機能させる「因」としての先天的なアレテーを欠いたなら、いささかも機能しないのである。この点は、キロンの輝かしい弟子たち——アキレウス、イアソン、アスクレピオス——を介して十二分に確認されるにちがいない。というのもキロンは、「かれらを、後天的に育て上げたが、それは、ふさわしい事柄をすべからく用いて本人たちの先天的な心を強化してのことであつた」からである。まことに示唆に富んだ言い回しながら、しかも、あの問題への長い思索の所産である、豊かな果実が数多く含まれていたとはいへ、これ自体、貴族たち——危機の時代の只中でみずからの立場を維持しようとひたすら腐心した——の用心深い、決意以外の何ものでもない。

オリンピック競技の勝者に具わつたアレテーと同じく、詩人の技術も、学ばれるものではない。双方とも同じ神的な源から流れ出ていたからである。詩人の技術は、その本質において「知恵」と呼ばれるほかは

ない。ピンダロスが「詩的天分」を表示するのに用いたのは、決まつてソピアというギリシア語であつた。ここにいうソピアを満足のいく形に翻訳するのは、出来ない相談」というもので、各々は——翻訳に際して——ピンダロスの精神の真の本性とその効用をどう捉えるか、というみずからの見解に従うほかはない。その見解にはしかし、どうしようもない差がくつきりと認められたけれども……。もしもソピアが、すぐれた詩を生み出す、技法の把握しか意味しないなら、美的に訳されて問題はないかもしれない。ホメロスは、大工のソピアを口にしていたし、前五世紀にもそれは、なおも完全に「巧みな技術」を指していたからである。けれども、ピンダロスの用いるこの語は「さらに重い」と感じないわけにはいかない。かれの時代まで延々とソピアが用いられてきたのは、いつそう高次の知識、例外的ともいふべき把握、主題をめぐつて並みの——尊敬すべき——とは言わないまでも——吟遊詩人の理解力をはるかに超えた洞察、等々の持ち主に対してであつた。この語を、みずからの詩的理解力に用いた人物としてクセノパネスが挙げられるだろうか。かれはその詩において、天地万有をめぐる当時の見解を完膚なきまでに叩きのめしたおのれの批判を、誇らしげに「わが知恵」と呼んでいたからである。このような言い回しとこのような見解がどうしても切り離せないのは明らかで、双方は一体化して、かれのソピアを形造つていた。同じことはピンダロスの深い黙想技術にも当てはまるにちがいない。この「ミューズの徒である預言者」が口にするのは「真実」で、「そうした真実はかれの心の奥底から引き出される」。かれは、人間の真の価値をめぐつて「判定」を下し、神話的伝統についての「真の物語」をあまねく嘘で塗り固められた「偽の物語」から区分した。この詩人は、ミューズたちから吹き込まれた「聖なる使命」のゆえに、みずからの席をこの世の王たちや偉人たちの傍らに定めて憚らない。広く

人びとの間に、氣高い席を占める資格が、かれらと共有されていたからである。かれには、大衆の称賛を浴びたいといった想いはなかった。「貴族たちに交わって十二分に満足してもらえますように」——これは、第二ピュティア頌を閉じる際の章句で、シユラクサのヒエロンに語りかけられていた。

それでも詩人は、たとえ「貴族たち」が裕福で強大な力を誇つていても、へりくだって、機嫌を取つたりはしない。かれは、なおも「直言を呈する人物として、いかなる支配の下であれ——都市を守護するのが暴君的な王であれ、はたまた賢者であれ、あるいは僭主連中であつても——大きな注目を引いていた」。かれの信じるころでは、知恵が目 にされるのは貴族社会を描いてない。これを反映して、かれの詩は最も深い意味で、秘儀の色合いが濃いのである。「わたしは、あまたの足速の矢を筒に収めてわが腕に吊り下げる。それらの矢は、理解する者にのみ語りかけ、つねに解説の徒を必要とする。生まれつき多くを知る者は掛け値なしに賢い。しかるに、ムダなお喋りに害されて学びもしなかつた連中は、大神ゼウスの聖なる鳥（＝詩人）に反抗してワタリガラスのように喚き立てるが何の益もない」。かれの詩（「足速の矢」）が必要とする「解説の徒」とは、詩の解釈に求められる高次の洞察を生まれつき具えた、貴族的な魂の持ち主を描いてない。ピンダロスの他の作品には、驚の姿がよく目にされるが、ここでも、第三ネメア頌の終わりに登場している。いわく、「驚は、あまねく鳥たちの間でも足速で、はるかな高みから矢のように降下し、鋭いかぎ爪で血まみれの餌食をさつと捕獲するが、お喋りに余念のないコクマルガラスは、それにも気づかず低い処でひたすら餌を漁っている」。ピンダロスはこの驚をみずからの詩的使命への自覚のシンボルとみなしている。驚は、単なる飾り立ての小道具ではない。精神の本質は、近寄りがたい程の高みに生活

して、お喋りに余念のないコクマルガラスが餌を求めてさまよい歩く湿った低地のはるか上に広がる、空中の王国を自由に動き回ることなのだ——かれはこう口にしてはいるが、その際に実感されていたのは、わたしの描いているのは精神に具わる形而上学的特性なのだ、という想いであつたにちがいない。この譬え話は、いつそう若い同時代のバキリデスに引き継がれ、次々と手渡されて最後には、以下のようなエウリピデスの壮大なセリフとして登場する、「あまねく天空は、雄々しい驚の飛翔に開かれているのだ」と。ここには、ピンダロスのいう「精神の貴族」のあり方が表明され、ゆえにこれは、真の貴族主義者とはどうしたものかへの当人の見解を不滅の形で主張したものとみることができよう。アレテー自体は、血に基づいている、というかれの信仰はここにも顔を覗かせていた。この信仰が告げるのは、みすからに具わつた先天的な詩的能力と、「学習した輩（マントネス）」の後天的な知識の間に広がる果てしない、裂け目なのである。貴族の血を介したアレテーの世襲にどのような見解を抱くにせよ、ピンダロスの指摘する裂け目だけは、すなわち、アレテーの所有者に具わる先天的な貴族らしさと、学習によつて単に後天的に獲得されたにすぎない知識や力の差、だけは認めないわけにいかない。双方の差は、現実のものとして否定しがたいからである。当時、ギリシア文化は、学習に途方もなく広い可能性を与え、その意義を途方もなく大きく推論したが、ピンダロスは、そうした時代の入り口に、あろうことか辛口の「真実」を堂々と掲げて憚らなかつた。

そのようなピンダロスから離れるにつれ、われわれは、貴族の世界に背を向けてますます深く沈黙に身を沈めながら、騒々しい歴史の流れに再び入り込んでいく。ピンダロス当人は、偉大な詩の中で——それと意図しないで結果的に——騒々しい世界を置き去りにして顧みなかつた。強大なシケリアの僭主であつたテロンとヒエロンの二輪戦車競走での勝

利を称えるにあたって、全ギリシアに及ぶみずからの働きかけを十二分に自覚していたからである。当人は、かれらの築き上げた新国家を理想化し、かれらの仕事を、煌びやかで厳かな旧来の貴族理想で飾りながらさらなる権威と重要性を付加したが、これを目にする、あるいはこう感じられるかもしれない、成り上がりの独裁者たるもの、つねに好んで「貴族」という誇らしいが着古された装いでわが身を飾りたがるものだが、それにしても、これ自体は「歴史的なパラドックス」ではないのか、と。ピンドロスはしかし、これらの頌では貴族的慣例などを通り抜け、あくまでも自前の声で他の箇所とは比較にならないほど明晰に語っていた。こう実感されていたからである、王たちを相手にした教育こそ、新時代を迎えて貴族主義的な詩人が勤しむべき最後の、しかも最高の仕事にほかならない、と。プラトンと同じくかれが強く望んだのは、かれらを感じて善くし、その上で誘いかけて、変わり果てたこの世でみずからの政治的夢を実現し、大衆のいや増す厚かましさにブレーキを掛けるにはどうすればよいか、を教え示すことであつた。そのような使命を心に抱いて、かれは、シユラクサの絢爛たるヒエロンの宮廷で、シモニデスやバキリデスなど「学習した」人びとの中でも最大級の面々に交じつて「真実を告げる」使徒として孤独な生活を送つた。そのような事情は、ディオニュシオスの宮廷で、ポリュクセノスやアリスチッポスなど高名なソフィストに囲まれて孤独な日々を送つたプラトンとも基本的に変わらなかつたにちがいない。

ピンドロスの歩んだ道が、ヒエロンの元を訪れたもう一方の偉人のそれと交差したのか否か——これを明らかにするのは大いに興味深いかもしれない。ここにいう「偉人」とは、アテナイ人のアイスキュロスを指す。当人は、シユラクサの地で『ペルシア人たち』を二度に及んで上演していたからである。誕生して間もないアテナイ民主制の軍隊は、マ

ラトンの地からペルシアの大軍を追い返した。加えてサラミスでも、アテナイ艦隊とその将軍たちとその政治的エネルギーは、勝利と自由を決定的に勝ち取つてヨーロッパと小アジアに住むギリシア人のすべてに分ち与えた。ギリシアの人たちは、大国ペルシアを相手に国家の存亡を賭けて雄々しく戦つたが、ピンドロスの都市は、あるうことか恥ずべき「中立」を決め込んでじつと傍観しているのみであつた。ヘラスの全体に及んで将来にわたる新たな力の感覚をしっかりと呼び覚ました英雄的出来事の確かな反響を、なんとか当人の詩に探り出そうとしても、耳にされるのは、不安そうな傍観者の分断された心が漏らす深いため息ではないだろう。イストモス頌の最後の箇所で、かれは「タンタロスの石」に言及しているが、これは、テバイの頭上に長らくぶら下がつて或る神の手で他に移された「伝説の石」であつた。これを介して思い描かれていたのが、果たしてペルシアの支配という危機であつたのか、はたまた勝つたギリシア側の憎しみ——テバイの手でその決起が裏切られたので仕返しに「滅ぼしてやるぞ」と脅していた——であつたのか、この点はよく分らないけれども……。ところで、ペルシア戦争を語る古典的な抒情詩人に祭り上げられたのは、ピンドロスでなく偉大なライバルともいふべき博学多才のシモニデスであつた。ギリシアの諸都市から戦没者たちの記念碑に刻むべき追悼詩を依頼されたのは、煌びやかで、冷静で、熟達した文体を得意としたシモニデスの方だったのである。ピンドロスがその当時、シモニデスに負けて背景に押しやられたのは——今日からみると——「悲劇的な不幸」のように映るかもしれないが、察するに、かれの姿勢自体に由来する必然的帰結ではなかつたか。というのもかれは、もはや「時代遅れ」であつたヒロイズムの賛美にひたすら固執していたからである。勝利を収めたギリシアはしかし、かれの詩にサラミスの精神に近い何かを見出し、アテナイも、熱情を込めたデイ

チュランボス調で「歌にも有名な、王冠を頂いた光り輝くスマイレよ、ヘラスの若よ、輝きわたるアテナイよ、聖なる都市よ！」と訴えかけるこの詩人をこよなく愛した。ピンダロスの作品は、アテナイの手に導かれて新世界の全体に及んで生き残ったが、そのアテナイは、かれとは基本的に質を異にし、かれもまた、アテナイの敵であったアイギナ——この「テバイの姉妹」は、船乗りや商人からなる裕福で古い家系に溢れていた——にいつそうの親近感を抱いた。ともあれ、ピンダロスの心の母体としてその口から大々的に称えられた世界は、すでに「消滅」していた。偉大な歴史的な社会には、深く確かな知識を用いてみずからの理想を形作る力がおのずと具わっているものだが、この力は、当の社会の命脈が尽きる瞬間までしっかりと保持されているわけではない。社会自体が命脈を断つとき、不死なる「魂」は、かりそめの死すべき「身体」から解き放たれて喜びに打ち震えるが、これは、ほとんど「精神的な自然法則」と称されてよいのかもしれない。ギリシアの貴族文化はこのように、最後のもがきの中でピンダロスを生み、死にゆくポリスを生み、さらにはプラトンとデモステネスを生んだが、中世の教会組織も、その盛りを過ぎた時点でダンテを生んだからである。

訳者あとがき

ここに紹介した和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ

自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が「様変わり」するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。今回は、紙数の制約もあって、「第一巻、アルカイック期のギリシア」の「第十章、貴族社会…葛藤と変容」のみを掲載することにした。

(池坊短期大学幼児保育学科教授・本学文学部非常勤講師)